

次ぎに、辭を五種に分類して居ります。則ち、靜辭が三種、動辭が二種、併せて五種であります。

又屬辭に

- 一、させ、さす、さする、さすれ
- 二、られ、らる、らるゝ、らるれ
- 三、悪しかり、善かり
- 四、貸せり、勝てり、刈れり

の四種あること、次ぎに、屬とならざる動辭に四種、屬となるものに九種あること、靜辭に三種の差別あることを説き、終りに係結に關して説明して居ります。

是は一の卷に就ての御話ですが、他の六卷はまだ見ないから、ドイニエーとかが書いてあるか分りません。廣蔭の著書に『言靈幽顯論』『神國音韻論』『詞の玉禪』といふものがあるといふことが、此玉禪の中に見えて居ります。其中で、『詞の玉禪』といふものは、動詞の活用圖であります。則ち、四韻詞、一韻詞、

詞の玉禪

天言活用圖

言靈のしるべ

伊迂韻詞、衣迂韻詞、變格詞、音雜詞、動辭等の活用を示したものです。終に辭動靜概略といふ圖に於きまして、辭と他の言葉との連絡を示して居ります。段の名稱は未然段、續詞段、斷止段、續言段、已然段となつて居ります。天保四年十一月に出來た、海野幸典の『天言活用圖』といふものがあります。是は言葉の活用を圖にして示したものです。此圖を解釋したもので、『天言活用圖略解』、『天言活用圖抄』といふものがあるといふことです。又、外に『天言活用抄』といふものがあるといふことが、此活用圖の中に見えて居ります。

次ぎに、黒澤翁滿の『言靈のしるべ』といふものが三卷あります。上卷は嘉永五年に出來て、同六年に版になつたものです。是には詞の活用と、手爾遠波の結と、假字遣に就ての研究があります。此活用には、八衢には四種活用と、外に變格と形状の活用と併せて六種ありますが、此變格と形状は言に入れたら、是には四段、四段再の活、咲けらん、押せらん、一段、上二段、下二段、三段、來、爲、おはす、三行の活、寒み、寒さ、寒し、寒きの末加佐の三行に活くも

下巻の活字

活字の形
七三の活字の形
の批評アリ

古言清濁考

の(二行の活、久し、久しきの如く佐加に活くもの、一行の活、幽、速、明の如くか
けに活くもの)の九種に分類して居ります。
中巻は安政三年に出来ました。是は四百許の手爾波の意義と性質とを解
釋したもの、又、下巻は悉曇韻鏡を引て、我邦の五十音の外國に優つて居る
といふとを説いたものであります。次に、『言靈』といふ名稱は萬葉から
取つたものであるから、一音一義を説いて居る言靈家の言靈と混雜して
はいかぬといふことを斷つて居ります。
第四、音韻の研究に關しては、享和元年に出版になりました、石塚龍麿の『古
言清濁考』といふものが三卷ありますが、是は我邦の古代に於ては、清濁の
區別が尤も嚴正に立つて居つたが、其後段々混雜して來たから、之を矯正
しやうといふとを説いたものであります。此清濁考には古事記、日本紀の
歌、及び訓註と、萬葉集中の假字書の處丈けを、材料に取りました。又此中
も古事記は少しも誤りがないが、日本紀萬葉集になると、間々間違がある。
其他、出雲風土記、續紀の宣命、佛足石歌、古語拾遺、姓氏錄、新撰字鏡、延喜式、祝

古言本音考

詞、神名帳、和名抄等の假字は、清濁殆ど不明であると申して居ります。一、
古言の清濁が正確で、今言の清濁が混雜して居るといふことに氣が付い
たのは本居翁で、既に此事に就ては記傳の中に論じられて居ります。龍麿
は本居翁から研究の方針を聞いて、此清濁考を著したのであります。
次に、此清濁を研究したのは、陸奥國信夫郡の金石音主といふ人で、『古言
本音考』一冊といふものを著はしました。是は古言は總て清音で、濁音は少
しもなかつたといふ説であります。此論の前半は文政七年十月に出来上
り、後半は同十年十一月に出来り、全部は同十一年十二月に版になりました。
此本音考に本居太平の序が載つて居りますが、其中に此論旨には不賛
成であるが、音主からは非自分の序を添へて、出版して呉れといふ依頼で、
實は迷惑であるが、致方がないから序を添へて出版するといふことがあ
ります。それで古代に於ても、清濁の二音が存在して居つたといふことは
確ですが、是は三音考あたりの趣意を誤つて、此の如く極端になつたもの
だらうと存じます。

漢吳音圖

韻鏡の研究に就きましては、先きに文雄の『磨光韻鏡』といふ立派なものが出来ましたけれども、是は完全といふまでには至らなかつたので、中には随分誤りもあり、又開合なども違つて居りました。此研究の一步進んだものは、太田全齋の『漢吳音圖』三卷であります。是は文化十二年に出版になりましたもので、全齋が此音圖に於て、特に考へ出したことに就ては、凡例の中に次ぎの様に申して居ります。

愚考六條あり、阿耶王三行并拗音を眞字に作る一也、影喻第四等を耶行の定位となす二也、漢吳音並に原音次音あることを發す三也、二百六韻の左右に國母上中下の韻を記す四也、三内喉舌唇の撥假字古は音博士ありて正しかりしを、中古已來亂れたるを復す五也、於字十一轉開音なることを徵す六也、此六を立て、字音の國字を定むる也。

是までは拗音直音と言つて居りましたのを、全齋は原音次音に改めました。猶此音圖に就ては、猪狩文學士が『漢文典』の中に次の如く批評せられて居ります。

萬葉用字格

皇國の言靈

拗音直音の稱を原音次音に改め、以て唐音和音の關係を説く、尤も周到なり。その國字譯に端首聲カナツク中身聲カナ韻尾聲キの三韻を用ひ、以て字音假字遣を説くことは、蓋し朝鮮諺文に本きしこと疑ふべからず。その原音を亂用するに至りしは、惜むべき瑕瑾なりとす。

次ぎに、春登上人の『萬葉用字格』といふものがあります。是は文化十五年二月に版になつて居ります。是は萬葉集の假字の用格を説明したもので、此用格には正音、略音、正訓、義訓、略訓、約訓、借訓、戲書カの八種あります。それで此八種の用格を五十音順に分類して説明して居ります。此外春登の五十音に關する研究で、『五十音摘要』といふものもあります。又『假字音便撮要』二冊、『悉曇筌蹄』一冊、『豆爾遠波賤手卷』二冊といふものも著はして居ります。

文政八年に脱稿して居る、林國雄の『皇國の言靈』といふものがあります。一軀我邦には言靈家と稱する一派の學者が、ありまして、言語を以て非常に靈妙なものとして考へて居りました。是が爲め、言語の研究が往々没理的にな

りまして、牽強附會に陥つたであります。此『皇國の言靈』も其一種であります。其大意を御話いたしますと、
 第一、五十音は元來阿の一音から出て、又之を約めると阿に返るからして、此阿といふものは、天地自然の音聲であるといふことを説き、次に生落ちた小供はあきあきと泣くと俗にいつて居るが元來阿と於ては同音で極く近い音であるから、そう聞えるかも知らんが實は誤りである。あきあきあきあきと泣くのは、我邦の言語ではないのである。唐天竺に生まれた子供はいざ知らず我邦の小兒は始より拗音にあきあきと泣くべき理由がない。是は阿を引てア、と泣くのであるといつて居りますが、三音考よりも一層没理的であります。
 次に、印度支那にても我邦と同じく、阿行を本とすることを説き、古言に阿を發語とするのも、全く阿は天地萬物の始めであるからである。又阿行音は言葉の下に附くことも手爾波に使用することもないといふことを説き、次に、い、う、えに二あるが、阿行のものは、言葉の下に来ることがない

厚敷か國檢
返りレリ

から、實際下に來て活用するのは、也和の二行の音である。故に、阿行の三音は親で、也和二行の三音は子である。此親子の關係は予の發明で、前哲未言であると言つて居ります。
 又、也行のい、えの活用は、四段活と違つて、いゆ、ゆえと活き、和行のう、うゑと活くといふことを述べ、次に、古言の假字を正すには、悉曇や韻學に拘泥してはいかぬといふこと、印度支那及び日本が共にあを發語とすること、歎息の聲は必ず阿音であるといふことを説いて居ります。
 又、五十音言靈活用の圖といふものがありまして、之を初、轉、用、令、助に區別して居るのは、全く『語意考』を受繼いだもので、少しも其上に進歩しません。又、阿加佐多の韻を天の象、阿伊宇衣於を地の象、於古曾止の韻を黃泉の象と定め、ましたのは、篤胤若くは守部の説と似寄つて居ります。其他初、轉、用、令、助の格、或は延言、約言、同音、同韻、通用等に就ての研究も、『語意考』と大同小異であり、ます。要するに、是は眞淵、宣長、篤胤等の悪い癖ばかりを取つたもので、餘りその上に進歩して居りません。

暗語

文政九年頃に出來た名島桃源翁の『暗語』といふものが二卷あります。是は五十連音、文字、冠辭、伊呂波等に就て論じたもので御座いますが、然し多くは本居派の説を受けたもので、餘り感服したところもない様であります。

次に、天保十二年に出版になつた『言靈音義解』四卷といふものがあります。但、前の三卷は『安鼻起農綱』と言つて、清原道舊の著はしたもので、後の一巻は『詞農墨繩』と言つて、大津源季隆の著はしたものです。

第五、語源説に關したものは、『國辭解』三卷といふものがあります。是は音義派に屬するものですが、著者は分りません。然し書中に光枝といふ名が見えて居りまして、此人の著はしたものと云ふことは確ですが、其姓は分らないのであります。又、終りに「コーエー」ことが書いてあります。

寛政六年寅の秋、長月、信濃國はに科の郡、千曲河のほとりなる旅寢の宿りにて記しぬ。

此書の主點丈けをザット御話いたしますと、我邦の言語を研究するには、

國辭解

先づ其音の起るところを知らなければならぬ。一、此音は心の音で、言葉は心の形である。然るに、外國では其聲のままに言ひ、我邦では言葉を結合して、心を表はすのである。故に、言葉には必ず次の如き三要素が存在して居るものである。例へば、之を「嬉し」戀ひしといふ言葉に就ていふと、

- 一、もとつ心の言 (う) (こ)
- 二、副へわきまふる言 (れ) (ひ)
- 三、助け收むる言 (ま) (ま)

(このきは上の三言の心をさし極むる意なり)

我々は此三要素を以て、總ての言語を解釋し得るが、又次の如き要素もあるのである。

- 一、事を起す言葉 さ|男鹿 さ|夜更けて
- 二、うつくまひ蒙らす言葉 み|芳野 ま|菰
- 二、尊び蒙らす言葉 み|影 み|位

國辭解便蒙

以上の心得を以て、我々は言語を解釋しなければならぬといふことを説きまして、次に萬葉の歌、手爾波、或は伊呂波等を一言一義的に解釋して居ります。又、終りに詞の延約に就ての説があります。此外矢張り光枝の著はしたもので、『國辭解便蒙』といふものがありますが、是は『國辭解』と全く同一のもので、唯是には上卷の終りに『國辭解』にない説が少し加つて居るものと、『國辭解』に解釋して居る伊勢物語の一節が、此便蒙に省いてあるのが、少し違ふだけであつて、

辭の音の貌

又天保十一年に出來た、井面守訓の『辭の音の貌』四十冊といふものがありますが、是も矢張り音義派に屬するもので御座います。

第五章 第四期の國語學

第四期の國語學の特質

前回に申述べました通り、我邦の國語研究は、第三期に至て粗完成いたしました。此の時代に顯はれたもので、重なるものを申上げますと、春海の『假字大意抄』、春庭の『詞の八衢』、『詞の通路』、朗の『言語四種論』、信友の『假字本末』、義門の『活語指南』、『山口栞』、『於乎輕重義』、『奈萬之奈』、全齋の『漢吳音圖』等でありまして、是等の研究に依つて、語法上の定格、及び其他の問題が粗確定いたしました。然るに、是に續て來る第四期は、如何なる状態にあつたか、と申しますと、此時代は内外多事、所謂兵馬倥傯の際でありまして、悠々學事に日を送るといふことは出來ない。天下の志士皆蹶起して、身を國事に委ねた時代でありました。故に學術の研究は、其種類の如何を問はず、一般に衰微したのであります。殊に國學の如きは、多く隱士の手落ちて、殆ど世の中に顯はれない様になりました。明治維新の原動力は、たゞ一國學

の力與つて多きに居るとは申せ、此時代に於ては國學者の地位は全く萎靡して振はなかつたであり、國學者の地位既に此の如き状態でありましたから、従て其の研究に於ても見るべきものがなかつたのは勿論のとて、或點から見れば、前期よりも却て退歩したところがあります。又前期の研究以外に新生面を開いたといふ處も真に渺いので、偶、鶴峯の『語學新書』の如きものが顯はれましたが、更に之を完全にしようといふ研究は遂に出で参りませんでした。則ち、明治時代に至るまでは、此『語學新書』の系統は全く中絶して居つたと言つて宜しいでせう。其他中島廣足、萩原廣道、黒川春村、大國隆正、權田直助等の學者もありましたけれども、彼等の研究は別に第三期の國語學以上に進歩したところも餘り見えません。勿論一二の點に於ては進歩したところがないではありませんが、全躰としては幾何も進歩してないのであります。唯此時代に於て、鹿持雅澄の『萬葉集古義』と、中島廣足の『増補雅言集覽』は前期に比較して、少しも遜色なき事業と言つて宜からうと思ひます。次ぎに、第四期の國語學に就て大略申述べませ

足代弘訓

足代弘訓

(三四四一六天明年三四年)

弘訓は伊勢神宮の權禰宜で、正四位上まで進んだ人であり、始めは久老の門人で、後に春庭翁に就て學びましたから、殊に八衢に委しかつたので、其著書にも『八衢補翼』、『八衢大略』といふものがあります。其他『詞の重浪』、『歌集類語』に、をば童諭』等の外、考證に關するもの、又和歌を分類した類語類句といふやうなものが、多く顯はれて居ります。

詞の重浪

詞の重浪十冊

是は言語を五十音順に集め、源語、詞葉、新雅、源氏玉の小櫛、消息、文例、雅語、譯解、中の解釋で、弘訓が適當と思ふものを取つて、是に書き添へたので、ただ自説はつけてないのであります。奥書の中に阿波國の學友の爲めに、輯めたものだといふことが見えて居ります。

歌集類語

歌集類語八十六册

是は

あはれ いま ながめ たのめ ばかり かぎり だに さへ
すら

等の言葉に就て、況く證歌を集めたものですが、然し編纂の年代は分りません。私が見たものには、天保十四年から嘉永三年に渡つて、荒木田興平が謄寫したといふ奥書がありますから、天保十四年以前に出来たといふことと丈けは分ります。

八衢大略

八衢大略一册

弘訓が春庭に就て、親しく八衢の直傳を受けたのを、佐々木弘綱が又弘訓に就て之を學びまして、其大略を書き集めたのが、則ち此『八衢大略』であります。是は單に活用の一斑を示したのみで、別に八衢以外の新研究は見えません。此終りに牒言に次の四種あることを説いて居ります。

一、有形牒言

日月山川

鹿持雅澄

鹿持雅澄

(二四五一—八安政三年)

- | | |
|---------------|-------------|
| 二、無形牒言 | 年月春夏 |
| 三、用言をその儘用ふる牒言 | うたひ やどり かすみ |
| 四、用言の活を省く牒言 | うた やど よど |
- 弘綱の跋は、安政四年正月五日の日附であります。

雅澄は『萬葉集古義』の著者として、尤も有名な人であります。此古義と宜長翁の記傳とは、徳川時代に於ける二大著書と言つて宜しいといふことは、前に申述べました。萬葉集の註解及び是に關する著書が、非常に澤山あるといふことは、木村正辭翁の『萬葉集書目』を御覽になると分りませう。仙覺の『萬葉集抄』、契沖の『萬葉集代匠記』、水戸の『釋萬葉集』、東麻呂の『萬葉集童蒙抄』、眞淵の『萬葉考』、千蔭の『萬葉集略解』を始めとして、其他随分立派なもの、澤山ありますが、然し古義の考證の該博なると、判断の正確なる

鹿持雅澄

三八七

古義の目錄

どには、遠く及ばないと思ひます。古事記の註釋は、記傳を俟て始めて完全なものとなつたと同じく、勿論記傳には誤謬、萬葉集の研究も古義に依て、殆んど遺憾なきまでに進んだと言つて宜からうと思ひます。

此古義は大部なる點に於ても、前後に比較すべきものがないので御座います。東麻呂の童蒙抄の如きものもありません。今次に古義の目錄を申しませう。

- 萬葉集古義 九五
- 萬葉集名所考及附録 七
- 萬葉集人物傳 三
- 萬葉集品物解及目錄 五
- 萬葉集枕詞解 五
- 萬葉集總論 四
- 古言譯通及目次 五
- 永言格 三
- 言靈徳用 一
- 用言變格例 一
- 舒言三轉例 一
- 雅言成法 二
- 鍼囊 二
- 結詞例 一
- 玉晴考 一
- 萬葉集古義註釋目錄 四

言靈徳用

言靈徳用

萬葉集名所國分 一
是等を取りまどめて、古義と申しますが、全部百四十一冊ありまして、宮内省の藏版になつて居ります。是から古義の中で國語に關するものを抜き出して、御話いたしませう。

是は我邦の國牀の優美なるを説き、次に國牀が優美であるから言語も從て純正である、といふところは、彼の三音考と同じ論鋒であります。何故我邦の言語が、外國語よりも純正であるかといふと、我邦の古音には五十音以外に不正の聲音がない。是に濁音二十を加へて、すべて七十に過ぎないのである。然るに、古代に於ては、濁音は甚だ少かつたので、一音の言葉に濁ることもなく、二音の言葉でも其語頭を濁ることがない。唯連聲の場合に濁ると、二音三音の中又は終を濁ることがある許りで、其外は一向濁るといふことがなかつたのである。然るに、中古以來物語などの中に、語頭すら濁るものが出て來たのは、全く支那及び印度の言語の影響に外なら

ぬといふことを説き、次に、我邦の言語を清、假濁、濁、半舌の四種に分け、清は上にありて天子に當り、假濁は中にありて保佐に當り、濁と半舌とは下にありて臣下に當ると言つて、此理由を鼓吹して居りますが、此の如く聲音若くは言語を、比喩的に論ずることは、音義派の癖で、守部なども既に『五十音小説』の中に是に似寄つたことを言つて居ります。

終りに正音圖と不正音圖とを出して、正音圖の方には我邦の清、假濁、濁、半舌の四種を置き、不正音圖の方には、

- 一、一音の言を濁り、又、二音三音の始を濁るもの。
- 二、拗音
- 三、撥音(閉口音)
- 四、半舌音(良行)
- 五、疊濁音(タビ^〇ピト、ウヂ^〇ガハの如)
- 六、半濁音(ば行)
- 七、急切音

誠 齋

の七種を配して、之を禽獸に當てて居りますが、是は宣長翁よりも一層没理的の様に考へます。

誠齋一名歌詞三格例

是は天保九年三月に出來上りまして、結辭に就ての研究であります。則ち、結辭を

正格 別格 偏格 格外本

の四部に分類して、各是に證歌を添へてありますから、一方から見れば、係結の呼應の研究と見て宜いでせう。又、證歌は重に萬葉から取つたのです。が、其他紀記又は古今集等よりも、材料を集めて居ります。

正格を第二位(い韻)、第三位(う韻)、第四位(え韻)にて受くる格に細別して居りますが、此二位にて受くる格の現在のきは、可無のきで、萬葉以前の歌では、こそと係つても、常にきで受けて、けれと結んだ例がないのである。何故といふと、可も無も活かぬ言葉であるからである。然るに、古今以後は之を活かして、上にこそとあれば、下は必ずけれと結ぶ例となつたが、其以前では

「衣こそ二重もよき」といふのは、正格である。次ぎに、別格は活かぬ詞で、正格の如く二ッ又は三ッに轉ずるといふことがない。又幾位で係を受けるといふ定まりもないのであるといふことを説いて居ります。次ぎに、

偏格は正格でも別格でもないものであります。翁は之を六種に分け、又格外本には係結の呼應に關係のない格を擧げ、猶其他手爾波に就て種々の研究を卷末に載せて居ります。

用言變格例

用言變格例

是は用言の變格を論じたものであります。翁はドーニ例を變格と認めたか、といふと、用言の四段に活くものは常格で、此以外に中二段又は下二段に活くものを皆變格と認めたのであります。要するに翁は四段を常格として、其他の活用をすべて變格と見做し、中二段下二段の如き活用は、四段から變化したものであるといふことを證明しようとしたのであります。例へば、恐、隱の如きは、古言であそりかくりと言つた例が多いから、是

はあそりあそる、かくりかくるとも、あそる、あそれ、かくる、かくれとも言つて、中二段にも下二段にも活く言葉のやうである。然しながら、一方に於て、恐らく隠らくともいふのを見ると、あそらんあそりあそるあそれ、かくらんかくりかくるかくれと四段に活くべき言葉であるのである。けれども、通例あそらんかくらんと活かせないで、あそれんかくれんといふのは、第一位を第四位に轉じた變格であらう。又、來はかんきくけと四段に活かすべき言葉であるが、將來をかんと言はずして、こんといふのは、かんと言つて聞き悪いから、それで第一位のかを、第五位のこに轉じたので、是も所謂變格である。又、舒言でとらへつといふのは、とりつの舒びた言葉であるから、必ずとらひつといはなければならぬのを、とらへつといふは、是も變格である。かくり留みといふ様に、常格に使つたものは、流石に奈良朝まではあつたが、其後は多く變格になつたのである。此の如く、四段活を以て常格とし、其他をすべて四段活から轉訛したものである。

舒言三轉例

だ、い、ふ、の、は、何、で、せ、う、か、四、段、は、活、用、の、主、要、部、分、に、は、相、違、あ、り、ま、せ、ん、が、
是、と、同、時、に、一、段、活、な、ど、も、主、要、部、分、と、い、ふ、こ、と、は、出、來、ま、す、ま、い、か、總、て、の、
活、用、を、此、四、段、に、歸、納、し、よ、う、と、い、ふ、の、は、餘、程、無、理、だ、ら、う、と、考、へ、ま、す。

舒言三轉例

是は舒言に佐行波行及び加行に舒びたもの、則ち三轉の種類があるといふことを説明したものであります。此三轉で意味の變るといふことは、予が始めて發見したことで、是までは何人も研究しない處であると言つて居ります。

一、佐行の轉例

い、摘ま。さ。ね。刈ら。さ。ね。
ろ、有。り。た。た。し。有。り。と。き。こ。し。て。
は、た。い。す。つか。は。す。ら。し。き。
に、も。た。せ。ら。め。し。ね。ば。せ。

以上の例は、さしすせに轉用して、敬ふ方に舒べたものであるが、然し舒り

たる道理許り知つても、言葉の意義を明にしなければいかぬ。例へば、取るはとらすとらふとらくの三種に轉ずるが、此三種は少しつゝ意義が違ふといふことを知らなければならぬ。

二、波行の轉例附也良二行の轉例

い、う。つ。ろ。は。ん。す。ま。は。ん。
ろ、す。ま。ひ。つ。か。た。ら。ひ。
は、呼。は。ふ。な。が。ら。ふ。
に、聞。し。め。さ。へ。語。ら。へ。
ほ、さ。か。は。え。
へ、手。た。づ。さ。は。り。て。
と、や。す。ま。る。べ。き。

以上は波行のはいふへ、也行のを、良行のりるに轉用して、事を緩めたる方に舒べたる例である。

三、加行の轉用

い、あらなくに
 ろ、通ひけまく
 は、計りけらく
 に、更けぬらく
 ほ、仕へまつりつらく

以上は加行に轉用して、用を帯びたる方に舒べたる言葉である、と言つて居ります。是が三轉例の大略であります。

雅言成法

雅言成法 天保六年成

是は古言を解釋する方法を説いたものですが、其方法に就ては、總論に於て次ぎの様に言つて居ります。
 一 躰昔の人々は雅言に一定の規格があることを知らずして、無暗に古言を解釋する傾きがあるが、是は宜しくない。本居翁すらも此規格を知られなかつたのである。殊に昔の學者は、略言といふことを以て、言語の解釋の重なる手段として居つたが、是も宜しくない。それで予が始めて是に氣が

結詞例

付いて、略言といふことに重きを置かずして、古言の解釋を試みたが、一として規則に合はんといふことではないのである、といふことを述べ、次ぎに韻鏡又は悉曇を以て、古言を解釋することは避けなければならぬ。又、反切若くは略通は全く用ゐて悪むといふ譯はないが、唯無暗に通路又は延約するを以て、古學の主旨と心得るのは誤りである。故に、何故に此く舒りたるか、何故に此く約りたるか、といふことを確め、同じ言葉でも活用の如何に依つては意味が違ふから、古人が如何に之を使用したか、といふことを明瞭に知らなければならぬ、といふことを説いて居ります。要するに、我邦の言語には自ら動すべからざる規則が備つて居るから、先づ此規則を明に研究してから、後に古言を解釋しなければならぬと言つて、假略、非略、訛略、相通、訛通、轉換、清濁、轉換、轉訛、清濁、互訛、約言、舒言、其他手爾、遠波、言葉遣等に就て、此規格を説明して居ります。

結詞例

是ははも徒ぞのやか何こそ等の係を受けて、下に結ぶ言葉の例を出した

もので、其證歌は多く萬葉古今等から取つて居ります。左に「や」に就て一例を挙げますと、「や」と係りて其下に來る結びは、
くすつ、ぬふ、むむ、もんの意、むる、る、き現在、し過去、
まし、らし、

の十五種である。此外結に關係のな「や」に、四十三ヶ條あるといふことを示して居ります。それは、

| | | | |
|---------|---------|-----------|---------|
| やも(添) | つや | むやも | や(セハニヤ) |
| や(間かくる) | ぬや | ましやは | ハヤ(ハニヤ) |
| やも | や何 | や(反る意の) | ハヤ |
| 切とや | や何そ | やも(反る意の) | めや(ニヤ) |
| きや | むや | けや(ケハニヤ) | めやも(ニヤ) |
| やは | 何れや | や(のどめたる) | や(ヤラン) |
| や(願ふ) | をや(ヨ)の意 | や(ぶしにちくや) | や(かどぶら) |
| やも(同上) | はや | や(一種) | や(ヨ)の意 |

鶴峯成申

語學新書

ばや(同上) はや萬葉以前に用ゐたる格 や(同上) や(呼かくるヨ)の意
 れや(レハニヤ) 歎息ノヤ や(同上) や(下知のヨ)の意
 れや 詠ルヤ や(同上)

之を玉の緒に比較すると、此分類が更に緻密になつた様に思はれます。

鶴峯成申

(三五四九八天政六年)

鶴峯成申

成申の著書の中で、語學に關するものは、『語學新書』『神代文字考』『鏝木文字考』『詞鏡』『詠歌捷法』『韻學新書』『梵學新書』『蘭學捷徑』等ですが、又、平田篤胤の門人になつたことがあり、神道に關する著書も少々あります。又、成申が蘭學の知識を有つて居たといふことは、我々の注意すべきことであらうと存じます。

語學新書

成申の序は、天保二年十二月晦日の日附ですが、島田易清の序には、同四年

一、實跡言

い、統稱 (山人)
ろ、各稱 (富士山人麻呂)

二、虛跡言

い、副上 (白き雪)
ろ、副下 (雪白し)
は、比較
い、稱階 (雪は白し)
ひ、比階 (雪よりも白し)
へ、最階 (極めて白し)

三、代名言

い、人名 (わが君)
ろ、物名 (この、その)
は、指物 (これ、それ)
に、再説 (なに、たれ)
は、疑問 (しか、かく)
へ、汎稱

四、連跡言

い、現在
ろ、過去
は、未來

五、活用言

い、動他 又能活きも
ろ、被動
は、自動
未過現 未過現 未過現

活用言の九法

直説(鳴く)、許可(鳴くべし)、使令(鳴け)、不定(鳴かん)、疑問(鳴くか)、不無(鳴くなり)、不有(鳴かざ)、附説(鳴けば)、第二附説(鳴くとも)

六、形容言

七、 接續言

| | | |
|---|------|----------------|
| い | 状態 | (かつよくもほら、期々) |
| ろ | 時令 | (間なく、今は、一日もなし) |
| は | 處在 | (此方に) |
| に | 商量 | (深く、近く) |
| ほ | (員數) | (一度) |
| へ | 次第 | (先づ、遂に) |
| さ | 含有 | (宜、理りありや) |
| ち | 不有 | (いさ知らず、まだ) |
| り | 顯示 | (見よ、咳く) |
| ぬ | 勸奨 | (こは、あえて) |
| る | 同等 | (霜の置く、驚き鳴く) |
| を | 併合 | (なへに、なへて) |
| わ | 除去 | (こに、わきて) |
| ひ | 選取 | (ならねば) |
| よ | 禁止 | (なやきそ、かたるな) |
| た | 料度 | (大方) |
| れ | 疑問 | (涼しや、なに) |
| そ | 比較 | (よりさき) |
| つ | 通用 | (もしも、すらも) |

八、 指示言

| | | |
|---|----|-------------|
| い | 合連 | (も、に、も) |
| る | 分裂 | (また、はた、あるは) |
| は | 舍説 | (とも、たさひ) |
| に | 逆戻 | (さ、さも) |
| ほ | 原因 | (かれ) |
| へ | 議定 | (さらば、然らば) |
| さ | 設令 | (もし、あらば) |
| ち | 選取 | (よりは) |
| り | 除去 | (より外、より後) |
| ぬ | 逮及 | (て、にて、さて) |
| る | 政保 | (こひしくば、願くば) |
| を | 説明 | (さ、は、すなはち) |

九、 感動言

| | | |
|---|----|---------------|
| い | 所生 | (のなか、のほか、がした) |
| る | 所興 | (また、上に、中に) |
| は | 所役 | (後を、上を) |
| に | 所奪 | (跡より、間より) |

| | |
|---|----------------|
| い | 悲哀 (あな、あぢきなや) |
| る | 歡喜 (あな嬉し) |
| は | 驚駭 (あやこは何事ぞや) |
| に | 示威 (俗言シイ、シツ) |
| ほ | 祝賀 (あな尊ふさ) |
| へ | 要須 (か、かな、かも) |
| ま | 讚美 (あな甚し) |
| ち | 辱罵 (俗イマ、シイ) |
| り | 侮慢 (俗シヤチヨコザイナ) |
| ぬ | 發笑 (カラ、ロイ) |
| る | 招呼 (俗ヨイ、ヤイ) |
| を | 哭泣 (ヨ、ミ泣く) |
| わ | 禁止 (俗コリヤヤカマシイ) |
| が | 忿怒 (ヤオレウヌ) |
| よ | 勸勵 (サア) |
| た | 恐怖 (ヤレコソヤ) |
| れ | 教諭 (それぞこれぞ) |

次に九格を申述べますと

- 一、能主格 (係辭と結辭)
- 二、所生格 (轉言と轉言との間にあるのが)

三、所與格 (に、と、へ)

四、所役格 (を)

五、所奪格 (より、から、ゆゑ)

六、呼召格 (よ、や、やよ、いで)

七、現在格 (めり、らん、べき)

八、過去格 (て、けり、つ、志)

九、未來格 (ず、で、じ、ぬ、ん、なん)

是が『語學新書』の九品九格ですが、兎に角、一部に纏めて語法を説いたものでは、是が濫觴であります。『あゆみ抄』『挿頭抄』『装抄』又は『言語四種論』といふやうなものもありましたけれども、此の如く品格に分類しては居りません。此九品九格の法式は、蘭文典を模倣したものです。然し十分に日本語の性質を研究しないで、唯蘭文典の法式に當てはめた文ですから、随分誤謬も尠からないのであります。其一二を申しますと、(一)九品の分類は甚だ不完全である。即ち第二の虚轉言は轉言ではなくして形容詞である。第

四の連躰言は決して一種獨立の品詞とすべきものでない。又第六の形容言は形容詞でなくして副詞である。動詞を活用言の中に入れてあるが形容詞の活用に就ては何も斷つてないのである。

(二) 形容言を十九等、感動言を十七等、接續言を十二等に分類したのは、餘り細密に過ぎて却て色々に混雜して居る。たとへ混雜して居ないにしろ、此の如く細密に過ぎては、概括に困難である。

(三) 格の分類に於て、第一から第六までは、先づ宜しいとして、過去、未來、現在を前の六格と同等に並べたのは、誤である。之を一の格と見ることは出来まいと思ひます。

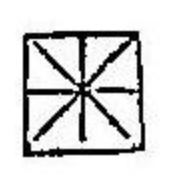
要するに、成申は日本語の研究には、餘り深くなかつた様であります。極く淺薄なる研究を以て、蘭文典の法式に當てはめたものですから、不完全なることは素よりであります。然し一部に纏つた文典としては、エホヰクメーキンダのものであらうと考へます。




鉄木文字考

鉄木文字考一冊

是は一名『神代文字點畫考』と申しまして、天保九年に出來たものであります。

是は先づ第一に神代口訣、本朝書籍目錄釋、日本紀、下部家の説、成形圖説等を擧げて、我邦の古代に文字があつたといふことを説き、次に、神代に文字の存在して居つたといふことは、以上のもののみならず、閩書呂宋の條、及び續博物志等にも見えて居る。又、河内國枚岡池輪神社の藏土^{ニゴロ}等に、鉄り付けてある阿奈以知といふものは、四十七字である。是は成形圖説此字躰は尤も能く鳥跡に似て居つて、繩に結ぶにも、木に鉄り付けるにも、便利なるものである。且つ是は一字一音であるけれども、或は二字合して一字となることもある。又、此中に濁音のないのは、言靈の助くる國の文字であるからであると言ひ、

次に、阿奈以知四十七字を擧げ、各字の下に點畫割出の考を添へ、其音義を示し、是と共に今の唐音、梵字、蘭字を對照して居りますが、此人の考では阿奈以知は總て  から割出したものだといふのであります。其他片假

字平假字等に就て説明し、終りにユーエーことを言つて居ります。阿奈以知の四十七字は、から割出したものだといふ自分の考を蘭學家高野瑞華に話したところが、自分も蘭字はの如き形から割り出したものだらうと思つて、長崎で聞いて見たが、如何にも其通であつたといふ瑞華の話の聞き、夫から自分は梵字の割出しも、此通ではあるまいかと考へて、漸々研究して見ると、面白いことには、是も矢張りから出たものだといふことが分つたのである。して見ると、天下の文字は盡く我が皇神の御教に原ついたものだといふことが、明であると言つて居ります。

此の如く、昔から神代文字の存在説を唱道するものが、澤山ありますけれども、多くは其材料が同一で、嶄新な處もありませんから、左程此論を輕重するに足らぬのであります。

嘉永剛定神代文字考一册

戊申が先きに天保九年に著した『録本文字考』は神代文字の存在を説き、其文字は阿奈以知四十七字であるといふことを論じましたが、此阿奈以知

神代文字考

は、則ち穴町であるといふことを論定したものが、此神代文字考で、嘉永元年に出来たものであります。

此神代文字考に於ては、先づ日本紀の問題記を引いて、日本紀以前にも假字があつたといふことを説き、此假字は神代文字で、而かも太占フクマシから起つたものであるが、此阿奈以知は則ち穴町であるといふことを説いて居ります。それで、此磨邇といふも、麻知といふも同語で、共に文字といふ義である。久慈眞智命、宇麻志麻治命を始めとして、其他麻知を神名として居るものが多くある。殊に大穴持神は大穴町といふ義で、此神は穴町を司る神といふことは明である。故に磨邇字は元來穴町に顯はれるものであるが、之を始めて文字に撰定したのは、大穴持神である。それで、神代文字に就て諸書を参考するに、多く阿奈以知に附合するし、又、片假字の如きも、是から出たものであらうかと思ふ。然し、自分はまだ古書の中に磨邇字を用ゐた例を見なかつたが、近頃釋日本紀の祕訓の中に、之を混用して居るのを發見したといふことを説き、次ぎに、此磨邇字を漢字に書き改めたのは、聖徳太子

以來のことで、是から以後は片假字、平假字が専ら行はれて、磨邇字は遂に消滅したといふことを述べて居ります。

此外猶成申の神代文字に關する意見は、序文に於て見ることが出来ます。其大意を申し上げますと、我が神代文字は太古の^元柴町から出來たものである。此柴町は天八意命、天思兼命が四十七の象兆に依て作られたものであるが、始めて之を文字に撰定したのは、彼の大穴持命である。楚漢及び西洋の文字は、其字體こそ多少差があるだらうが、其點畫筆法は皆我が神字に原いたものである。何故といふと、五大洲は素と亞細亞から開け始められたものである。亞細亞といふ語は神といふ義である。一神天下の事物は皆東方から始まつて來たので、印度の伊舍那天、漢の天靈氏、地靈氏は我が諸丹の二神童子天は我が少彦名神、伏羲氏は我が大國主神の事である。故に天下の古説は皆我が古傳説と同じものである。殊に文字の如きは皆我が神字に原いたもので、彼の篆書は我が神字を本として、倉頡が之を敷衍したものである。

と言つて居りますが、此の如きは實に一種の迷想でありまして、科學の範圍外に逸したものである。言はなければなりません。此成申の神代文字説は、篤胤の系統を受けて、一層附會に陥つて居ります。

長野義言

長野義言

(二四七五文化十二年
五二二文久二年)

義言の國語に關する著書は『活語初の栞』『玉の緒末分櫛』『かつみぶり』等でありますが、此外音韻上のものも少々ありました。又豫告に『末分櫛附録』『通路街の栞』といふものも見えて居りますが、是は公になつたか何うか分りません。

玉の緒末分櫛三冊

義言の序は天保十四年九月の日附ですが、三浦尙之の跋は弘化二年七月であるのを見ると、此頃出版になつたものだらうと思ひます。

先に申述べました通り、本居翁の玉の緒は廣く材料を集めた丈けで、手爾

玉の緒末分櫛

波の性質又は使用法に就ては、委しい解釋はありませぬ。然かのみならず、猶漏れた處も、誤つてゐる處も、尠からんで、義門は繰分を著はして、粗其缺點を補ひました。然るに、猶足らん處があるといふので、義言が此未分櫛を著して、委しく註解を加へました。要するに、此未分櫛は手爾遠波の性質と其使用法との説明に、力を盡しましたものですから、證歌の如きも、多くは省略し、其範圍も八代集に限らず、専ら理解し易きものを主として取りました。又活用等に就ては、十分八衢及び通路を考に入れて、論定致しました。此未分櫛が玉の緒と何の點に於て違ふかといふことは、凡例に記してありますから、其大略を御話いたしませう。則ち、(一)未分櫛に取り入れた手爾波の活用は、玉の緒のみならず、八衢又は通路からも取つたのである。又手爾波の種類は、大方玉の緒に従つたけれども、分類を改めたところもあるのである。則ち、願辭、仰辭及び未然言、續言、已然言より受くる手爾波、外活、志久活、羅行四段の變格等に分類し、或は、玉の緒には一處に集めてあるものも、是には二處に分け、其他手爾波の格に就て、玉の緒に漏

活語初の栞

活語初の栞一冊

れたものは、別に命名したものである。(二)證歌は僅か一二首を載せ、是も可成古雅なものを撰んだけれども、一昧未分櫛は手爾波の意義と、その使用法とを説明するのが目的であるから、證歌は了解し易きものを主として取つたのである。(三)手爾波の解釋は、多く玉の緒に従つたけれども、猶了解し悪いところは、委しく註解したが、其他玉の緒の誤つて居るところ、或は、足らぬところに就ては、可成詳細に説明したのである。(四)未然言、續言、切止言、續言、已然言、又、外活、志久活の如き、玉の緒に見えない名稱を用いたといふことを説き、猶委しいことは、『未分櫛附録』に載せてあるといふことが見えて居ります。

弘化三年二月十五日に、堀内廣城が校合を了つて居ります。一昧是は詞の自他と、詞の延約の二項に就て、研究したものであります。又、此活用に就ては、義門が委しく研究してあるけれども、間違つてゐるところもあるから、猶『通路街の栞』の中に、委しく之を論じて置いたといふことが見えて居り

ます。

(一) 詞の自他 自ら然る時に、四段に活く詞も、他より然らしむる時には、下二段に活き、自ら然る時に、下二段に活く詞も、他より然らしむる業をする時には、四段に活くことが多い。又、中二段下二段で、自他の別れるものもあると言つて、語例を通路及び八衢から取つて、此自他を圖解して説明して居ります。

次に、雅言の延約圖説がありますが、別段新研究でもないやうですから略します。又、終りに年月日の名義、春夏秋冬の名義、十二ヶ月の名義に就て解釋して居りますが、此十二ヶ月の名義の解釋は清輔の奥儀抄、真淵の語意考を始め、其他多くの書籍に散見して居りますから、比較して御覽になつたら面白いだらうと存じます。

鈴木重胤

鈴木重胤

(二四七二文久三年)

詞のちかみち

重胤の著書に、『詞のちかみち』三冊、『詞の座芥』二冊、『祝詞講義』三十四冊、『經緯歌』一冊といふものがありますが、次に、『詞のちかみち』に就てザット申述べませう。

詞の捷徑 三冊

此捷徑は先輩の研究を採萃したもので、重胤の研究と見るべき處は、殆んどないと言つて宜からうと思ひます。それでは何ういふことを記してあるかと申しますと、上巻には音韻、辨言、用言、自他活言、運用活字、禁止辭、助辭、係辭、結辭、中巻には假字用格、下巻には字音假字遣と、發語に就て説明したものです。要するに、成章、宣長、春庭、隆正等の研究から單に採萃したものであります。其一、二を申述べますと、第一、音韻に於て、翁は先づ『漢字三音考』の説を受けて、我邦の言語の純粹正雅なることを述べ、次に隆正の説を取つて、古今萬國を問はず、音韻の根源ははひふへほで、此音を長く引くと、其韻からあいうえおの五音が顯はれて來るから、此波行音は阿行音を引き出す導音、阿行音は諸音を統ぶる統韻、ヤレニクヨヲ非于エヲは變化

鈴木重胤

をする爲めの重音であるといふことを説き、又、五十連音圖を作つて、阿行に廣厚、加行に堅牢、佐行に窄小、多行に剛直、奈行に和順、波行に變更、末行に渾融、也行に進前、良行に形狀、和行に揉曲の意義があるといふことを説き、次ぎに、躰言を有形躰言、無形躰言、用語躰言、用略躰言、二合躰言の五種に分けてありますが、此分類は既に足代翁の『八衢大略』に見えて居りますし、又、用言に就ての説明も、八衢と大同小異で別に新説もありません。唯少し違ふところは、活用を四段、一段、中二段、下二段、變格、形狀言の六種に、更に變格を加、佐奈、頁の四種形狀言を久活、志久活、祢久活の三種に分類して居ることでありませぬ。

自他活言、運用活字、禁止辭等は孰も脚結抄、八衢、通路等から採いたもので、別に取り上げていふべき程の事もありませんから略します。又、假字用格は『定家假名遣』を本として、『古言梯』『雅言假字格』『今古假名遣』等を参考し、猶古書に訂して論じたものであるといふことが見えて居ります。又、下巻の字音假字遣は、本居翁の『字音假字用格』から抜き出したものであり

萩原廣道

萩原廣道

(三四七三文化三十年)

要するに、此捷徑は翁の國語に就ての研究と見るべきものでありませぬ。唯音韻の事も、語法の事も、假字遣の事も、一所に集めて國語を學ぶ人達の便利を計つたものでせうですから、此捷徑は今日普通に行はれて居る文典の濫觴と見ても宜からうと思ひます。鶴峯の『語學新書』は西洋文典の法式に従つて日本語の品格を説明したもので、それには音韻、假字遣等に就ての説明はありません。又、活用や助動詞に就ての研究も、極く幼稚で、説明の躰裁も今日の文典とは全く違ひますから、それで捷徑の方を今日の文典の始まりと言つた方が宜からうと存じます。

廣道は『源氏物語評釋』の著者として、有名な人でありませぬ。此評釋は源氏の註釋としては、尤も完全なものです。惜しい事には、完結して居りませ

いふ言葉が「か」と重る時は「か」が「何」の下に来るのが通例であるから、此結の格は「下」の「か」から受けたものであるといふことは明である。然るに、宣長翁は之を盡く「何」の結びとして、「か」の係辭を「や」の附屬の「やう」に考へられたか、それ、それで此の如く誤られたのである。又、「何」と結との間に「か」文字のないものもあるが、その結辭は意味が十分盡きない格であるから、是も「何」の結と定めることが出来まいと思ふ。例へば、

難波なるながらの橋も盡くるなり、今は我身をなにとへん。
春霞なにかくすらん櫻花、ちる間をだにも見るべきものを。

といふ歌に於て、「何」に「た」とへんは、「何」に「た」とへん例ふべきものなしといふ意味であるから、決して切れたものを見ることは出来ない。左すれば、「何」の結といふことも言へないだらうと思ふといふことを説き、次に「何」は決して係辭でないといふ譯を論じて居ります。

(四) 玉の緒の二の巻には、變格といふ名目を立て、居るけれども、是は餘情を含めた略語の格と、「何」の下を通常の如く結んだものとの二の場合で、

別段變格といふべきものでないと言つて、其理由を辨明さ。

(五) 次ぎに「ぞ」と「こそ」の區別を説いて、「ぞ」は語勢稍軽く、「こそ」は重い。「ぞ」といふ意義は、其の字の意味で、然るは「其なり」と指示して、極く確な言葉であるから、決して動くまじき處に用ゐるのが通例である。然るに、「こそ」は此字其字の意味の言葉を二、合せたもので、此は「やがて」其なりといふ様に指示したもので、「ぞ」よりは稍重く、確なる言葉であるから、抑揚も一層強いのである。

(六) 第二の「や」は同類の手爾遠波であるが、「二」ながら反語になるからであらうか、玉の緒に「自らん」とはねて、結ぶものが多く、と治定するものが、慟いといふことを説かれて居る。是が「ぞ」又は「こそ」と異るところであるから、今假りに「激辭」と名付けたと言つて居ります。是が此係辭辨の大幹ですが、次ぎに『小夜時雨』に就て一寸申述べませう。

小夜時雨

小夜まぐれ一冊

此題號は次ぎの如き、自作の歌

小夜志ぐれまた音たてゝいぎたなき學の窓を驚かさばや。
に原いたものでありまして、その意は即ちかの本居翁の

玉霰學の窓に音たてゝ驚かさばやとめぬ枕を

に應じたものであります。で本居翁の『玉霰』は、廿一代集以後、言葉の使用法が甚しく亂れて來たから、之を古風に復へさうとせられたので、廣道も其例に倣つて、此『小夜時雨』を著はしたので、御座いますから著作の趣意は全く『玉あられ』と同様であります、尙改めていふと、次ぎの通りであります。

勅撰集は有識の人々の撰ばれしものなれば、玉葉風雅を除きては、別に怪しき節もなければ、家々の家集には聞きなれぬ節多く、殊に夫木集、散木集など、殊更なる心地す。加之、契沖以後萬葉集の研究起り來りし爲め、萬葉の言葉を能く思ひ明らめぬ人々も、それを使用する様になれるより、甚しき僻事も多くなり來れるが如志。故に、今その怪しき節々を押しくるめて批評せんとす。但し、雲の上人又は當時有名なる人々のものはさて置きて、同輩の人々のもののみを論せんとす。云々(已上大意を取る)

是は著述の趣意ですが、是は重に「ドーユー」ことを論じて居るかと申します。歌道に關して種々の意見を述べ、又、手爾波及び用語の古意と異つて居る節々を説明して、終りに辨玉霰論評五條、辨玉霰論脱漏を附録として添へたものであります。

中島廣足

中島廣足

(二四四二寛政四年
二五二四元治元年)

廣足の著書で尤も立派なものとして申しますと、何人も『増補雅言集覽』と答へませう。是はいかにもそうでありまして、此事業に對しては、我々は、大に感謝しなければならんと存じます。此書に就ては、前に御話いたしましたから、今改めて申述べません。次ぎに、玉の緒、八衢、玉霰を増補したものがありますから、それに就て申上げませう。

詞玉の緒補遺

詞の玉緒補遺一名手引糸六冊

是は安政五年に出來上つて、同七年に出版になつたものであります。此凡

例の中に、此補遺は玉の緒に漏れたもの、又は、その中の首肯し難き點に就て論じたもので、始めの草稿は餘程浩瀚なものであつたが、其後義門の繰分、義言の未分櫛、廣道の係辭辨等を見るに、玉の緒の足らぬ處を補ひ、或は、誤つて居る處を正してあるから、最早是に就ていふべきことがなくなつたのである。然し、自分の集めた證歌は、是等の著書に比較すると、殊に多くあるから、之を丸で捨てるのも惜いから、書き記したのである。それで證歌は玉の緒にあるものは勿論、繰分、未分櫛等に引てあるものは、皆之を省いたが、唯必要なる場合には引いたものもあるし、又、其範圍も萬葉から八代集に至るまでと限らずに、後世のものでも、古例に適つてゐるものは、之を引き出したといふことが見えて居りますから、是で増補したる程度はザツト分りませう。

詞の八衢補遺

詞の八衢補遺一名陸路道二冊

是は安政四年に出版になつて居ります。一躰春庭の八衢は猶漏れてゐるところも、誤つてゐるところも尠からぬものですが、稍之を完全にしたのは、義

門の『山口栞』であります。然るに、是にも猶漏れてゐるところがあると言つて、之を増補したのが即廣足の此補遺であります。始め廣足が八衢に書き入れた事柄は、随分澤山ありましたが、『山口栞』と附合するところは、概ね削除したものだから、それで今のやうに僅かなものとなつたといふことです。此補遺は上下二卷ありますが、其上卷は八衢の補遺で、下卷は『檀の朽葉』の四の卷附録として載せたものですから、是は八衢には少つとも關係のないもので御座います。下卷の目錄は

すさびといふ詞

だに、さへ、すらの遺様

三句より初句に返る詞

日にそへて

そめるといふ詞

だに、さへ、すらの例書き添へ

の六ヶ條であります。

玉霰窓の小篠

玉霰窓の小篠前編三卷後編二卷

本居翁の『玉あられ』は證歌がありませんから、初學の人々には餘程六かしい。又中には随分怪しいところもありますので、廣足が汎く證例を集めて、註解を施したのが、此窓の小篠であります。前編三卷の中で、上中の二卷は『玉あられ』に證歌を挙げたもの、下卷の附録と、後編の二卷とは廣足が増補したものですから、『玉あられ』には全くないものです。

前編は嘉永七年に出來上つて文久元年に出版、後編は明治二十年に出版になつて居ります。

片糸

片糸一册

是は嘉永六年に出來たものでつるとぬるとの差別を説いたものであります。で始めにぬるとつるとに對する諸家の説を述べ、終りに自分の説を述べて居ります。其説は

今案ずるに、ぬるとつるとは自然と使然とに依りて、或人の説の如く、清く別れたるもあり、また、互ひに相通はしたるもあり、(玉霰及び義門の説

黒川春村

黒川春村

(三四五九寛政十一年
五二六慶應二年)

是なり。借つるは稍輕き方につき、ぬるとは稍重き方につき、言へるもありと覺ゆ。又、しらべにも依れるなるべし。又、古と後とに依りて異なるもあり。是も通ふところあるより、自ら移りこしものなるべし。後なるを總て誤とは爲し難くや、云々。

春村は和歌俳諧のみならず、考證及び音韻の學問にも長じて居りました。此人の考證學は狩谷棧齋から受けたものだらうと思ひます。音韻に關しては『音韻考證』三十冊といふものが、尤も有名なものです。其他國語に關する著書も澤山ありますが、餘り公になつて居りませんから、惜しい事には易く見ることが出來ないのであります。で春村の著書に就て委しく申述べることが出來ないのは、誠に遺憾ですが、それは追て補うことゝ致しまして、茲にはその名稱ばかり申上げて置ませう。

二十二年

黒川春村

四二九

詞客用例是は八衢に漏れたる活語を集めたもの三冊

音韻啓蒙

古文音例五冊

詞海金八冊

活語四等辨

詞八衢附考二冊

用字活用考

増補據字造語抄三冊

天言活用考一冊

野々口隆正

野々口隆正

後姓を大國と改む

(三四五二 明治四年)

隆正は篤胤の門人でありましたから、此人の國語及文字に関する研究は、餘程篤胤の感化を受けて居る様に思ひます。神字の存在を唱道し、或は言語に靈妙不思議な勢力の存在を信じて、宇宙の眞理を發見し様として、神秘的に附會致しました。其委しい事はその著書に就て御話致しませう。

活語活法活理抄四冊

是は國語の活用と其法理とを論じたものですが、其總論に「コト」を

活語活法活理抄

言つて居ります。抑音韻言語は道の依つて出づるところにして音韻は實に萬理の大本を綜合するものである。故に釋迦は阿字を觀じて離欲寂靜の道を悟り、仲尼は仁中孝等の字の如く支那古言の中で緊要なる字義を了解して齊家治國の道を傳へられたが、我邦に於ては此の如き道を言語に就て論じたものが無いのである。眞に遺憾であるから、是に志したといふとを説き、次に八衢家、語學家といふものもあるけれども、皆既成の言葉に就て研究するのみで、其大本を説明するものがないから、それで、此大本から説明しようと思ふといふことを述べ、次に、世の中の人が天地あつてから後に人がある。人あつてから後に聲がある。聲あつて後に言葉がある。言葉あつて後に五十音圖が出來たものと思つて居るが、實はそうでない。我が古言の五十音圖を見るに、五十音圖は本で言葉はその後に出來たものであるのみならず、天地も此五十音圖から後に出來たものである。然るに世の中に之を怪しいと思ふ人もあるけれど、人間の聲あつてから後の五十音圖は、既發のものであるが、天地開闢以

前に既に未發の五十音圖があつたのであるといふことを説き、次に、五十音圖の本旨を委しく知らんと欲せば、先づあれとわれとの差別を知らざるべからずといふことを述べて、此あれとわれとの差別を説明して居ります。又活語に本行、借行、枝言葉の三種あるが、此本行はらりるれを添へても活くが、又添へなくとも語を爲すもの、借行は他行の言葉を借らなければ、語を爲さぬものであるといふこともいつて居ります。

是が總論の大體ですが、隆正はあまり言語に重きを置き、言語には一種靈妙の秘力があるものと信じて居つたやうに考へます。それで此言語に依つて、宇宙の眞理を説かうとしたのですから、中には随分附會の説もあるのであります。

神理入門用語訣

神理入門用語訣二卷

是は本行活用借行活用結辭活用の三種に分類して、活用を論じたものであります。で上巻には借行五格別格、結辭格、下巻には本行の對格を説いて居りますが、此活用の説明は前の活理抄と大同小異であらうと存じます。

人天合離對格

人天合離對格(詞の墨繩第二集)一卷

是は自他の研究で、活語に人爲と天然との兩格あることを説明したものであります。

言葉の正道

言葉の正道一册

是には隆正の天保七年八月の序が載つて居ります。緒第一、大旨に於て、人類の萬物に優れる所以は、言語に依ること、我邦の萬國に優れるは、言語の純正なるによること、我邦の言語の萬國に優れるは、活語に依ること、我邦の言語は用法嚴重にして、運用自在なること、次に、我邦の古言には、万國の根源は、はひふへほなること、波行は阿行を引き出すための導音、阿行は諸音を統ぶる統韻、和行也行は變化をする爲めの重音であるといふことを述べ、此説は重胤が詞の捷徑第三には、歌道のことを説き、第四辨正に於て諸家の説を批評して居ります。則ち我邦に於て五十音圖を以つて言語を解釋することは、既に顯昭及び仙覺の著書に見え、次に、この方法か「和

言傳『春樹顯秘抄』に至て少しく委しくなり、『和歌童翫抄』『語意考』に至て、稍委しくなつたのである。然るに、『語意考』は始めより終まで、大方誤り許りで取るべきところが眞に甚い。今の學者が通路延約に依て、古言を解き誤るのは、此書の爲めに誤られたのである。又、成章の『脚結抄』『挿頭抄』は自然に近いところが多い。宣長の『詞の玉の緒』春庭の『詞の八衢』は、完全なるものとは言へないが、然し立派なものである。次ぎに、景樹が字音俗語を歌に詠み込んで宜しいと言つたのを攻撃し、高田與清がむめむまは中昔の言葉であるから、其頃のものにはうめうまを書いてはいかぬと言つたのに反對して、是はすべてうめうまと書かなければならぬといふことを説き、次ぎに荷田翁の糟粕を嘗めて、亂りに言靈説を亂用することを責め、次ぎに、『皇國の言靈』の中に、小兒の初聲はあゝで、あぎゝでないと言つてゐるのを、齒牙にもかくるに足らぬ愚論であると笑ひ、小兒の聲音は朦朧たる不熟音であるから、あぎゝと泣くのは少しも怪しむに足らぬといふことを述べ、第五指辭のあかそ、則ち、あのかのそのこの、あなたかなた

通畧延約辨

通略延約辨一冊

そなたこなた、及び、をちこち等の意義と用法とに就て論じて居ります。

是は天保五年五月に出來上つたものであります。此大意を申述べますと、古來學者が眞淵翁の通畧延約の説に誤られて、古言を解釋するの之を濫用して却て古言の意を失ふものが多い、是れ畢竟次ぎの五ヶ條の缺點があるから、だうと思ふ、それは(一)沿革の理に疎く、(二)正訛を辨へず、(三)合語の法を知らず、(四)活語に委しからず、(五)通約延約を以て亂りに名義を解くといふ五ヶ條であるが、此缺點は通約延約を悪く心得たからである。故に此五ヶ條の缺點を正して、眞の通略延約の用法を知らしめやうと思ふと言つて、此五ヶ條に就て論じて居ります。然し、此五ヶ條に就ては、昔から委しく研究した人がありますが、隆正はその著書を読まなかつたであらうと思ひます。それで隆正の此辨は決して新説といふとは出來ない。中には随分誤つて居るところがあるやうに考へます。

神字原

神字原

『神字原』は『神詠歌道歌』『神字選』『神字小考』一名神字字原考、日文原字考、『考餘』の五部の總稱であります。其中で『神字小考』と『考餘』に就て、御話いたしませう。外のものはまだ見ないからパーユエーものか分りませぬ。此『神字小考』は日文に就ての研究で、篤胤の日文傳に自説を加へて、篤胤の説を確めたのであります。又『考餘』の方は神字研究の餘論を集めたものです。中に神字の作者が天八意命、天思兼命であるといふこと、又神字は我邦のみならず、海外諸國の文字も、多くは太卜から出たものであるといふことなどが、見えて居ります。

神字箋

神字箋一鋪

是は篤胤の日文傳を本として、先きに著はした『神字原』を採萃した者であります。要するに隆正の神字論は全く篤胤のを受け繼いた者ですが、その意見の大意を御話いたします。忌部廣成の古語拾遺の序に蓋聞、上古之世、未有文字とあるのを見て、我邦の古代に文字がなかつたと思ふのは誤りである。此序は漢字を指したので、神字を言つたものではないのであ

る。廣成は平安朝頃の人であるが、其頃既に神字が消滅して、唯印文などに用ゐて居つた許りである。それで神字がなかつたと思つたのかも知れないが、又、あつたど知りながら、是は漢字の弊を主として書いたものであるから、神字を度外視して、漢字が渡つてから後の弊を言つたものかも知れないのである。兎に角に、廣成の文字の有無論は事實を主として書いたものでないことは明かである。今東大寺にある天平勝寶元年の古文書、桃尾臣印文は、全く鶴岡鹿島等に傳つて居る神字のモモチで、廣成の拾遺を著はした大同より六十年許り前であるから、此神字の古いといふことが明である。と言つて、次に、神字に就ての研究を載せて居ります。其他國語に關する著書は、まだあるやうですが、餘り世の中に出で居りません。又、神道に關するものが澤山ありますけれども、それは茲に關係がないから略します。

權田直助

權田直助

(二四六九文化六年
五四七明治二十年)

權田翁は近世での國語學者で、其著書にも中々立派なものが多くあります。其著書の重なるものを申述へますと、次ぎの通りであります。

- 國文學柱
- 國文句讀者
- 詞の經緯圖
- 詞の眞澄鏡
- 語學問答
- 用詞分類
- 詞の八衢頭註
- 日本文典辨謬
- 辭格例證
- 詞の通路頭註
- 語學自在
- 文典辨疑
- 辭用辭圖解
- 形狀言八街
- 辭言分類
- 助辭分類
- 詞の玉緒頭註
- 形狀言五種活用圖頭註
- てにをは品定め

語學自在

語學自在二卷

上卷に先づ辭言を大別して、有形辭言、無形辭言、假辭言、轉用辭言、合辭言、屬辭言の六種とし、更に之を小別して、三十六種と爲し、(此は詞の眞澄鏡に圖せり) 用言を大別して、作用言、形狀言の二種とし、更に之を小別して、六種と爲し、次に、助辭を辭言と用辭との二種に別け、更に辭言を上辭(感歎疑問、接續、指示、助勢、通下辭、歎、疑、願、請、助雜)の二種、用辭を作用言、將の類、令の類、被の類、去の類、竟の類、登と云ふの類、形狀言を不可の類、不可の類、如くの類の二種に分類して、言葉と用辭との連續を説き、次ぎに、詞の轉用に就て、次の如く三種に分類して居ります。

- 一、四段活の第四音から、良行四段活の一格有に轉ずるもの、則ち、けらん、きけり、きける、きけれの如きもの。
- 二、爲といふ詞のせより、有に轉ずるもの、則ち、せらん、せり、せる、せれの如きもの。
- 三、久志幾活のくより、有に轉ずるもの、則ち、からん、かり、かる、かれの如きもの。

きもの、

次に、轉用躰言詞と辭との辨別、係り結び、五十連音、並に、六種の活、延語、略語、自他語格、手爾遠波用格、習語格法等に就て、説明して居ります。又、下卷には和歌と文章とを解剖して、語格を説いて居りますが、是は文章論の一端で、春庭義門等よりは一層進歩して居るやうに考へます。

堀秀成

堀秀成

(二四七八文、政元二十一年)

秀成の國語に關する著書は、『日本語學階梯』、『日本語格全圖』、『音義本末考』、『助辭音義考』、『語學問答』、『音圖略説』、『言靈妙用論』等ですが、猶學藝志林中などにも、少々國語上の意見が見えて居ります。

是で第四期の國語學に就て、大略の御話は濟みました。此時代の國語學は、要するに餘り立派なものではなかつたであります。然しながら、鹿持雅

高橋殘夢

高橋殘夢

澄、中島廣足、黒川春村、權田直助といふやうな立派な學者があらまして、此命脈を繋ぎ止めたのですが、又、一方から見ると、此時代の學者の傳も著書も不明なものが多いので、つまり國語界は衰微して、寂莫の觀を呈したと言つて宜しいでせう。是まで申述べました中で、山崎美成の『文教温故』、平井梧菴の『歌格類選』、續歌格類選、榊原芳野の『文藝類纂』、竹内布久の『ますみのかいみ』、『五十音分生圖』、谷千生の『言語構造式』、詞の組立、横山由清の『活語自他提覽』といふやうなものが漏れましたけれども、それは略して別段に申上げません。唯此時代の初期の人で、高橋殘夢といふ人がありますが、是は言靈家で著書も中々多くありますから、それに就て少々申述べませう。

殘夢は香川景樹の門人で、名は正澄と言つた人でしたが、委しい傳記は分りません。又此人は熱心なる言靈家でありましたが、然し是は何人の系統

靈の宿

を受けたものか不明であります。此人の著書は多くは言靈の理想を本として説いたものですから、或點は言語學の方よりは寧ろ哲學の方から研究したら面白からうと思はれるところがあります。是から著書の一二を取て御話いたしませう。

靈の宿 八册 天保七年十一月成

殘夢の言靈に對する理想は『靈の宿』の序文に於て見ることが出来ますから、御參考のため次ぎに載せませう。

此頃世の中に、言靈唱ふる人、こゝかしこに出て來にけり。そは人のものいふ聲に、魂あり。其聲を合せて名とし、詞とするが故に、言靈とはいふなりけり。万葉集に言靈の幸はふ國、言靈の助くる國といへる。則此事なりとぞ。夫れ詞は神のいひ始め玉ひ、名は神の付け玉ひしものなり。あたる處、句ふ處、響く處もなく、天ども、地ども、人ども、悲しども、嬉しども、たゞに言ひ玉はんや。は名付け玉はんやは、皆聲の靈によりて、言ひそめ、號けそめ玉ひしなるべし。抑靈は神也。口に云べくもあらず。筆に書くべくも

あらず。譬へば、味の如し。口にはその味を知るといへども、其味かゝりといふべきものならず。言ひ難く、説き難きが故に、靈也。五味の妙は、口に知り、五色の艶は、目に覺え、五韻の靈は、耳にささる。是れ則心耳の靈妙也。世の中にあるもの、天地の分、靈ならざるものなく、靈なきものあることなし。人を始めて、鳥獸草木魚貝金石、何かは靈なからざらん。まして長なる人のもの云ふ聲など、靈なかるべき。靈はすべて天地の靈なり。聲はすべて天地の聲也。暫く其物にやどりて發るが故に、鶯聲、鹿の音、松の響、水の音とは言ひ分るのみ。詞は合せ藥の如し。一種は一品の能也。五品あひては、五種一能也。七種十品皆然り。故に、言靈とはいふなりけり。其言葉の道やちまたなり。八衢なれど、其源を尋ねれば、唯言靈の一筋にて、其聲を縫目ども、結ども、冠辭ども、助辭ども、遣ひ分るが故に、八衢には成りゆけど、靈をだに聞知りて、かゝるは何と辨ふれば、又たどるべき道もなかりけり。旅に出づるも、家より始まりて、四方の國に渡り、渡出づる船の波路を渡るも、道は八衢に分るれど、かへればもとの湊なりけり。家なりけり。か

かれは、先づ聲の生まるゝ源をさとし、次に、其聲の靈をしめし、縫目、冠辭、助辭を説き、次に、結をさとし、名を説き、詞を説つべし。かく説き盡さずしては、言語の源、言靈に有といふこと辨へ難ければなり。さるを言靈唱ふる人、歌の上、文の上に委しく渡らず。たゞたまたまのみ云渡るが故に、世中なか／＼に怪しみいぶかりて、深く學ぶ人もなし。歌は調に聞き知るものなり。調は言靈に籠れるものなり。歌よむとならば、調をささるべし。調を知らんとならば、言靈を伺ふべし。下略

殘夢は實に此の如き理想を以て、言語を研究爲ました。で此『靈の宿』には、第一に五十音發生の狀態を説き、次に、五十音の解釋をして居りますが、是は一音一義に屬するものでありませう。其一二の例を挙げますと、

あ は顯はれ出づるの靈、顯はるゝ義、顯はすの詞、五音の源、喉音未言なり。靈は音の味也。匂ひ也。あゝの聲は顯出の味あり。匂あり。之を譬へて言は、夜將に明けんとする景色にて、光輝雲に匂ふに似たり。夜明ければ、万物形さやかに顯はるゝよて顯はるゝ義となり、顯はすの詞となりて、變化出

て來る。其變化を甘く心得ざれば、詞の訓義を説くこと難き。物名に一聲名あり。詞に一聲音あり。聲の靈義よく知らるゝものなれば、此所に擧げて靈義をささす。聲の靈をよく辨ふべし。此聲縫目なては結目に用ることなし。嗚呼、穴等の詞、感歎教の情を顯はす也。

や は飛走之靈、在中之義、又刺之義、疑之詞下略
さ は擴騷之靈、躁發之義、又小なる義、誘之義下略

此の如く、音義的に解釋し、次に、清濁、約言、略言、延言、其他助辭、冠辭等に就いて説明し、次に、縫目、結目に就いて、委しく解釋して居ります。要するに『靈の宿』は縫結に就ての研究であります。

殘夢の著書には、此縫結に就て研究したものが多くあります。則ち『紀記縫結抄』、『縫結大概』、『縫結定源』、『萬葉縫結抄』の如きものがありますが、さて此縫結はド・ユーーものであるかと申しますと、縫目の定義に

こゝに縫目と題せるは、世にてにをはと云ふものなり。中略其てにをはは一首と、したつる衣のはりめちちず、縫立つる聲なれば、暫く縫目とは

名付くる也。其聲てでにをはばかやそそのとどもよゑの十七聲に定れり云々。

又結目の定義に

結聲はらるるれりの五聲を始め何れの並も詞には結びて云へり。其結聲くけきくげぎづぢつぢぬぬふへひぶべびさそすせしずむめみゆゑゑの三十六聲なり。縫目聲に受けて云へるもの多し。

といふことが見えて居ります。是で大概ド、ユーものかといふことが御分になりましたらうと存じます。

國語本義

國語本義十册

是は言靈の理想を本として、語源を解釋したものです。益軒若くは千引等の語源論とは全く趣きを異にして居ります。其一二の例を申しますと「あきらか」あきは明なり。明入赤といふ義なるを、きの韻きにいを含め、りあを約めてらと云へるなり。あは顯はすなり。きは限りを極むるなり。夜明に入りて、四海隠れたる物なし。明らかなりといふ言の本なり。此一

言けし、けく、けき、けみ、けさの活用あり。

榮さか

さかはさきあの約、さきは咲なり。咲の顯はるゝ處を、さかといふ。さは擴り騒の靈、人身の上、物の上、事業の上、世に擴り騒き、くる世に震

ひ起るを、さかゆといふ。盛り、さかるの活語あり。

さかの訓義は同義なり。又、坂の名あり。日月の光擴り騒ぎ咲き顯はるゝ處といふ義なり。之を働かせて、高き處をさかといふ。鳥阪頭明等のさかなり。えは得にて、天なり。此詞をさかへさかふと結びていふは非なり。

此の如く、語源論として論ずるよりは、寧ろ哲學の方面から研究した方が面白いのであります。益軒派の語源論は常識を本として居ります。けれども、殘夢は言語を非常に靈妙なるものと信じて居りましたから、解釋の方法は尤で違うのであります。

國字定源

國字定源 二卷、弘化元年八月成

是は假字遣を論じたものです。が、殘夢の意見では、定家流の近躰派は憚あ

うあると言ふのみで、何故斯うであるかといふことに就ては、一言も言は
 んのである。然し、名義訓義を研究しなければ、假字遣を確定することは六
 かしいのである。故に『靈の宿』『國語本義』『言靈名義考』を著して之を試
 みたといふのであります。残夢は言語の名義及び訓義を解釋して、假字
 遣を定めやうとしたのですから、随分獨斷的です。此解釋の外に、聲の輕中
 重及び平上去も考に入れるのですから、先づ残夢の假字遣は、定家に私淑
 したものと見て宜しいでせう。
 其他『言靈東歌考』『言靈名義考』『三代枕辭例』といふものもあります。

岡本保孝

岡本保孝

保孝翁は明治十一年四月八十二歳で歿した人であります。一躰は漢學者
 ですが、國語及び音韻の上にも、非常に委しかつたので、其著書も數百種か
 らあります。其國語及び音韻に關したものを挙げますと、次ぎの如きもの
 が重なるものであります。

- | | |
|-----------|--------|
| 倭字考一 | 詞八衢補正三 |
| 和語省約例五 | 冠辭考存疑一 |
| 和語延約一 | 靈語通疑錄一 |
| 發字攷一 | 轉音考存疑一 |
| 古音攷一 | 和名抄聲韻二 |
| 古言梯補遺一 | 語例一 |
| 四十四音論辨疑一 | 言靈十九 |
| 撥韻假字攷存疑一 | 音韻考一 |
| 字音假字用格存疑一 | 磨光韻鏡考一 |
| 假字用格 | 音韻答問錄 |
| 文字考一 | 用の假字一 |

第六章 結論

國語學史の一斑に就ては、前回で粗述終つた積で御座います。諸君も定めし大略の事丈は、御分になつたであらう。然らば、我邦の過去に於ける國語研究は、幾何の程度まで進歩して居つたか、如何なる方面に、如何なる缺點があつたかといふことも、御了解になつたであらう。それで過去に於ける先輩の研究を、了解したる以上は、我々は將來に於て、國語の研究に對して、如何なる方針を取らなければならぬかといふことは、次ぎに起る問題だらうと思ひます。然らば、我々が將來我が國語の爲めに盡力すべき任務は、抑々、何んでありませうか。それは申すまでもなく、過去に於ける先輩の研究の、不十分なるところを、補ひ、次ぎに先輩がまだ着手しなかつた點に向て、新生面を開き、段々研究の領分を押し、擴めて、而して我が國語の世界に於ける地位を進めて行くといふことでありませう。それで

過去の研究に於ける缺點及その批評

過去の研究は、ドーであつたかと申しますと、概して不十分でありました。勿論或る方面に於ては、立派に成功して居りますけれども、他の方面に於ては、我々が感服の出來ないところが多いのであります。概して不十分であつたといふばかりでなく、研究の範圍も頗る狹隘で、全く着手されずに残つてゐる問題が幾らもあります。故に、我が國語の地位を高めるに必要なる研究は、まだ十分に完備しなかつたと言つて宜しいのでせう。語を換て申しますと、過去に於ては、眞に科學的研究——則ち言語學的研究と稱すべきものは、誠に乏しかつたのであります。然し、先輩の學者が國語の研究を等閑に附して居つたといふ譯でもなく、又不熱心であつたといふ譯でもない。皆實に十分にベストを盡して居りました。けれども如何にせん、既に總論に於て申述ました様に、何れも皆その關係學科の知識に乏しく、其上一種の偏狹な理想を有つて居りました。から眞正なる科學的研究は、遂に望み得られなかつたのであります。然しながら、是は決して先輩ばかり咎める譯には參りません。何故と申しますと、過去に於ける我邦の學藝界は、一般

に科学的研究に乏しく、國語研究の關係學科として見るべきものは殆んど成立つて居りませんでしたが、従て國語の研究も不完全であつたのでありませう。然るに今日の日本は既に昔日の日本ではありませぬ。百般の學術が彬々として勃興して参りました。我々は十分是等の科學的知識を應用し得る地位に達したのでありますから、我々が是等の科學的知識を以て、十分國語の研究に従事することは、實に今日の急務であらうと信じます。然るに今日の國語界はD-1でありませうか。先輩の研究に比較して、何れ丈に進歩して居りますか。否、幾何の進歩も爲て居りませぬ。却て先輩の研究したる範圍内にあつて、少しも其以外に進んで居らぬのであります。試みに御覽なさい。今日の國語學者の中で、契沖、成章、宣長、若くは春庭、義門等の研究した丈けの仕事を爲た人がありませうか。新生面を開いて、我國語界に一大貢獻を爲た人がありませうか。我々はまだ不幸にして是等の大事業を爲し遂げた學者に接することが出来ません。今日世の中に、出て居る文典は、随分澤山ありますが、然し是等の中で、徳川時代の國語學

將來に於ける國語研究の問題

以外に、何れ丈けかの新研究がありませうか。否、我々は不幸にして、まだ此の如き研究を見出すことが出来ません。多くは先輩の糟粕を嘗めたものたるに過ぎないのは、真に遺憾であります。是は文典ばかりぢやない、其他の問題も多くは此の如き状態にあるのであります。要するに、明治の國語學は遺憾ながら、まだ徳川時代の國語學を凌駕することが出来ないで、御座います。明治維新以來、既に三十年になりまして、他の學科に於ては、立派な事業が澤山出来て居るに拘らず、國語界は猶依然として昔の儘であります。我々は、まだ一の歴史的文典一の語源辭書を見ることが出来ません。のみならず、今日の國語界に於て、尤も必要なる日本聲音學、東洋比較言語學といふものも見ることが出来ないのは、誠に遺憾な次第で、御座います。然し、國語の科學的研究の必要を認めて、明治十九年大學に博言學科を置かれてから、以來、漸く十幾年に、しかなりませんから、我々が希望する様な結果の顯はれないのは、無理もないことだらうと思ひますが、兎に角、科學的知識を以て、大に我が國語を研究するといふことは、我々の責任だら

うと考へます。それで、諸君は今國語學史の一斑を御研究になりました。何の方面に何れ丈けの缺點があつたかといふことは、粗御了解になつたであります。我々の將來の責任は、是等の缺點を補ひ、或は新版圖を開拓して、我が國語の地位を進めるといふことであります。是等の點に就て、我々が將來研究すべき事項は、既に諸君が御承知の事だらうと思ひますけれども、御参考のため、大略次に申述べませう。

第一は文典の編纂に就てあります。此編纂法が頗る不完全であつたといふことは既に總論に於て申述べました。我々が今日有つて居るところの語法といふものは、中古時代の言語の慣習でありまして、明治時代のものではありません。則ち、此語法を規定するに供した材料は古今を通じて集めたといふのでなくして、僅に一時一地方の言語を取つて、研究したのであります。又、言語の種類から申しまして、和歌又は記録の一部を取つたもので、方言、俗語、口語といふものは全く度外視して、少しも研究してないのであります。此の如き一部の語法を以て今日の言語を支配し

文典の編纂
及研究法

ようといふことは、勿論出来ないのであります。然るに、之を以て強て今日の言語を支配爲ようとするから、随分色々な無理も出て來るので、のみならず、前に申述べました通り、研究に供した材料も不十分、研究の方法も不完全でありましたから、古代の語格に合はないところが、幾らも御座います。例へば、古事記の歌の中にある手爾遠波を分類して、今日の文典に合せて見ると、一致するとの出来ないものが幾らもある。又、萬葉集を持つて來て見ても、そうであります。今日の文典に普通に言つて居る動詞の九種活用といふやうなものが、古事記時代から完備して居つたか何うかといふとは、實例を取つて證據立てるとは困難だらうと思ひます。是等は我邦の文法家が多く類推して極めて居りますけれども、それも時に誤がないとは限りません。ですから、語法を規定する材料としては、汎く時代を通じて、和歌に限らず、記録に限らず、方言、俗語に至るまで、可成多數に蒐集して、精密に研究致しましたならば、今日の語法といふものは、餘程變化するでありません。一、體言語が生命を有つて居るといふことは、私が申すまでもな

い○明○な○事○實○で○あ○り○ま○す○然○ら○ば○言○語○の○時○と○處○と○に○依○つ○て○變○化○す○る○の○は○勿○論○の○こ○と○言○語○上○の○慣○習○も○亦○從○て○變○化○す○る○と○い○ふ○こ○と○は○明○瞭○な○る○事○實○で○あ○り○ま○せう○さ○う○す○れ○ば○語○法○は○始○終○之○を○改○め○て○當○時○の○言○語○と○常○に○一○致○す○る○様○に○為○な○け○れ○ば○な○り○ま○せ○ん○で○我○々○は○必○し○も○中○古○時○代○の○言○語○の○慣○習○に○從○は○な○け○れ○ば○な○ら○ん○と○い○ふ○義○務○は○な○い○の○で○例○へ○ば○ぞ○る○こ○そ○れ○は○古○來○の○慣○習○で○あ○り○ま○す○け○れ○ど○も○近○世○に○な○つ○て○は○此○呼○應○に○從○は○な○い○も○の○も○多○く○出○て○來○ま○し○た○若○し○此○呼○應○に○從○は○な○い○の○が○一○般○の○慣○習○に○な○つ○た○と○す○れ○ば○ぞ○る○こ○そ○れ○を○破○つ○て○も○必○し○も○破○格○と○い○ふ○こ○と○は○出○來○ま○す○ま○い○之○を○破○格○で○あ○る○其○人○を○無○學○で○あ○る○と○言○つ○て○攻○撃○す○る○人○が○あ○り○ま○す○け○れ○ど○も○そ○れ○は○餘○り○語○法○と○い○ふ○と○を○重○く○見○て○居○る○か○ら○で○あ○り○ま○す○語○法○は○單○に○當○時○に○於○け○る○言○語○上○の○慣○習○を○規○定○し○た○も○の○で○決○し○て○論○理○的○の○も○の○で○は○な○い○の○で○あ○り○ま○す○故○に○今○日○の○文○法○家○の○や○う○に○中○古○時○代○の○言○語○を○標○準○と○し○て○是○に○從○は○ぬ○も○の○は○破○格○で○あ○る○と○い○ふ○の○は○隨○分○酷○で○あ○る○又○一○方○か○ら○見○る○と○是○文○典○の○性○質○を○誤○つ○て○居○る○と○い○ふ○と○に○な○り○ま○せう○で○す○か○ら○將○來○我○々○は○今

語法研究に就て過去の缺點

日○の○文○典○を○或○る○程○度○ま○で○改○め○て○明○治○時○代○の○言○語○の○慣○習○と○一○致○せ○し○む○と○を○力○め○な○け○れ○ば○な○ら○ぬ○と○考○へ○ま○す○又○研○究○の○方○法○に○於○い○て○も○可○成○多○く○の○材○料○を○集○め○て○統○計○的○に○緻○密○に○研○究○す○る○と○が○必○要○で○あ○り○ま○す○語○を○換○へ○て○申○し○ま○す○と○語○法○の○研○究○に○は○分○析○的○と○綜○合○的○と○を○互○に○應○用○す○る○と○が○必○要○な○と○信○じ○ま○す○我○邦○に○於○き○ま○し○て○は○此○分○析○的○の○方○は○稍○完○全○に○成○功○致○し○て○居○り○ま○す○け○れ○ど○も○綜○合○的○の○方○は○九○で○進○歩○し○て○居○り○ま○せ○ん○ガ○ベ○ン○ツ○氏○が○此○綜○合○的○語○法○を○完○全○に○成○す○為○め○に○は○言○語○學○的○知○識○の○上○に○論○理○學○心○理○學○倫○理○學○美○學○の○知○識○が○必○要○で○あ○る○と○言○つ○て○居○り○ま○す○が○是○は○如○何○に○も○そ○う○で○あ○り○ま○せう○兎○に○角○今○日○の○文○典○は○種○々○の○點○か○ら○不○完○全○な○る○も○の○で○あ○り○ま○す○か○ら○我○々○は○言○語○學○上○の○知○識○を○以○て○大○に○我○邦○の○語○法○を○研○究○し○て○日○本○語○の○價○値○を○高○め○な○け○れ○ば○な○り○ま○せ○ん○

次に過去に於ける語法研究に於て如何なる缺點があつたかといふとに就て一寸申述べませう。是までは言語全貌を取纏めて研究したものは甚だ尠かつたので、多くは手爾遠波係結の呼應、又は活用とか、自他とか、單に

歴史的文典の必要

其一部分を取つて研究して居りました。然るに漸く第四期になつてから、『語學新書』又は『詞の捷徑』といふやうなものが顯れて來ました。が、是等は素より不完全なものであります。明治時代になりましてから、西洋文典の法式に従つて作つたものが多く出て參りました。是れ等は『語學新書』や『詞の捷徑』に比べて見れば、稍進歩したやうでありますけれども、然し動詞の時、自他又は尤も大切な文章法に就ての研究は、頗る幼稚であります。それで、我々は將來是等の事項に對して、専ら研究しなければならぬと考へます。

第二、文典には比較文典、歴史的文典、歴史的比较文典、批評的文典、又は教育的文典の如く、色々種類があります。が、此中で今日尤も必要なのは、歴史的文典だらうと思ひます。今日の文典は前に申述べました如く、單に一時代の語法を取つたもので、決して歴史のといふことは出來ない。然しながら、奈良朝には奈良朝の語法、平安朝には平安朝の語法があります。其他鎌倉、足利又は徳川時代にも、夫々特種の語法が備はつて居りますから、此各

口語文典の必要

時代に於ける言語上の慣習を、歴史的に研究するとが必要であらうと信じます。然るに、今日まで之を研究した人がありません。單に中古時代の語法に満足して、科學的にも歴史的にも研究爲ようとする人がないのは、誠に遺憾であります。次ぎに、東洋諸國と我邦との比較文典も必要であります。けれども、是は餘程言語學上の知識が入りますから、今日の國語界には到底望み得られないことでありませう。

次ぎに、明治時代の文典を作ることには、尤も必要なことであり、是まで中古時代の語法に従つて居りましたから、色々な困難がありました。が、若し眞に明治時代の文典が出來ましたら、始めて今日の言語に活用することが出來ませう。然しながら、此明治時代の文典を作るには、一の標準語を制定しなければなりません。今日の如く、國語が種々雑多に亂れて居り、ましては、何れを標準として文典を作つて宜いか分りません。活用に就て見ましても、中古時代には九種ありましたけれども、今では既に三種が五種に減じて居ります。然し、是も方言に依つて色々違ひますから、標準語を制

日本聲音學

定、し、ま、せ、ん、と、一、定、の、語、法、を、極、め、る、こ、と、が、出、來、な、い、の、で、あ、り、ま、す、で、す、か
 ら、先、づ、第、一、に、標、準、語、を、制、定、す、る、と、い、ふ、こ、と、が、必、要、な、問、題、で、是、に、次、で、言
 文、一、致、と、か、又、は、文、辭、の、統、一、と、か、い、ふ、や、う、な、問、題、も、附、帶、し、て、参、り、ま、せ、う。
 兎、に、角、明、治、時、代、の、文、典、と、し、て、は、チ、ヤ、ム、ベ、レ、ン、氏、ア、ス、ト、ン、氏、の、著、書、よ、り
 外、に、な、い、の、は、誠、に、遺、憾、に、思、ふ、次、第、で、あ、り、ま、す。
 第、三、に、は、日、本、聲、音、學、の、研、究、で、あ、り、ま、す。一、般、國、語、の、研、究、に、於、て、尤、も、必、要
 な、る、も、の、は、聲、音、學、の、知、識、で、御、座、い、ま、す、が、是、は、過、去、の、み、な、ら、ず、現、今、の、學
 者、す、ら、一、般、に、此、知、識、に、乏、し、い、の、で、あ、り、ま、す。現、今、の、文、典、に、於、て、は、音、韻、論
 が、尤、も、幼、稚、で、母、音、又、は、子、音、の、研、究、の、如、き、は、殆、ん、ど、見、る、に、足、る、も、の、な、し
 と、言、つ、て、宜、し、い、位、で、あ、り、ま、す。中、に、は、今、日、の、學、者、で、も、和、行、を、喉、音、に、入、れ、
 又、右、肩、に、二、點、を、施、し、た、の、は、濁、音、で、あ、る、と、い、ふ、や、う、な、定、義、寧、ろ、説、明、を、下
 し、て、其、性、質、に、就、て、は、少、し、も、説、明、し、な、い、も、の、が、あ、り、ま、す。又、母、音、組、織、及、び
 子、音、組、織、に、就、て、の、研、究、と、い、ふ、も、の、も、一、向、な、い、や、う、で、あ、り、ま、す。今、日、で、は
 ま、だ、く、三、音、考、流、の、音、韻、論、か、ら、獨、立、し、て、科、學、的、研、究、を、見、る、こ、と、が、出、來

辭書の編纂

ま、せ、ん、で、す、か、ら、是、か、ら、の、學、者、は、此、方、面、に、力、を、盡、し、て、日、本、聲、音、學、の、立、脚
 地、を、明、に、す、る、こ、と、を、力、め、な、け、れ、ば、な、り、ま、す、ま、い。
 第、四、次、ぎ、に、辭、書、の、編、纂、も、必、要、で、あ、り、ま、す。過、去、に、於、き、ま、し、て、は、字、書、は、兎
 に、角、辭、書、と、し、て、見、る、べ、き、も、の、は、士、清、の、『和、訓、栞』、了、阿、の、『俚、言、集、覽』、雅、望、の
 『雅、言、集、覽』、を、始、め、と、し、て、其、他、色、々、あ、り、ま、す。又、明、治、時、代、に、な、つ、て、か、ら、も、
 『詞、の、園』、『詞、の、林』、い、ろ、は、辭、典、『日、本、大、辭、林』、『言、海』、等、の、辭、書、が、顯、は、れ、ま
 した、が、然、し、我、々、は、到、底、是、に、滿、足、す、る、こ、と、が、出、來、な、い、。我、邦、の、辭、書、と、し、て
 は、猶、一、層、完、全、な、も、の、が、出、來、な、け、れ、ば、な、ら、ん、の、で、あ、り、ま、す。の、み、な、ら、ず、一
 般、の、辭、書、の、外、に、も、語、源、辭、書、俗、語、辭、書、方、言、辭、書、又、諸、般、の、學、藝、辭、書、と、い、ふ
 も、の、が、必、要、で、あ、り、ま、す。然、る、に、此、等、の、辭、書、と、し、て、見、る、べ、き、も、の、は、ま、だ、一
 向、な、い、の、で、御、座、い、ま、す。か、ら、將、來、の、學、者、は、宜、し、く、是、等、の、辭、書、の、編、纂、に、從
 事、す、べ、き、で、あ、ら、う、と、存、じ、ま、す。猶、辭、書、の、編、纂、法、に、就、て、は、上、田、博、士、の、『國、語
 の、た、め』、中、に、『日、本、大、辭、書、編、纂』、に、就、き、て、又、藤、岡、文、學、士、の、『辭、書、編、纂、法』、并
 に、『日、本、辭、書、の、沿、革』、第、一、國、文、學、第、二、卷、と、い、ふ、論、文、が、あ、り、ま、す。か、ら、御、参、考、の

假字遣其他
の問題

爲め御覽を願ひます。

第五國語研究の一部として第一期及び第二期に於て尤も重要視されて居りました歴史の假字遣は今日になりましては既に無用の贅物であると言つて宜しいでせう。是は單に教育上から見ても有害無益であります。此歴史的进行を打破して表音的に改正することが尤も今日の急務であらうと信じます。然し之を表音的にするに就ては字音の方は別に論がありませんが國語の方には少々論のあるとでありませうから歴史のと表音的との調和に就て研究することが必要だらうと考へます。其他文體及び文字の改良送假字法及び句讀法等の規定に就ても十分研究しなければなりません。

日本語の變遷

第六次に研究すべきことは日本語の變遷であります。一語言語には生命がありますから始終變化するといふことは申すまでもないことでありませう。我邦の言語も昔から非常に變化いたしました例へば萬葉集と古今集とを比較して御覽になりますと用語の點から見ても語法の點か

ら見ても又意義の點から見ても非常な差があるといふとは直ぐ御分に
なりませう。又平安朝と鎌倉時代とを比較しても明かに此變化を了解す
ることが出来ます。故に我々は此變化の状態を研究することか必要であ
りますが、それと同時に何故に此の如き變化が出来たかといふことを明
に爲なければなりません。此言語變化の傾向に就ては、ホイットニー氏は
次の通りに分類せられて居りますが、我々は此の如き分類法に従て、昔か
ら我邦の言語が何う變化したかといふことを研究することが尤も必要な
ことであらうと信じます。その分類法は、

- 一、古語の變化(現今思想表彰の要具に使用せらるゝもの)
 - い、體形變化するもの。
 - ろ、意義の變化するもの。
 - は、體形意義共に變化するもの。
- 二、古語の消滅(既に消滅して現時之を使用せざるもの)
 - さ、語詞の全然消滅するもの。

ろ、文法の形式及び區別の消滅するもの。

三、新語の發生。

い、新語詞新形態を發生して、古語の材料を豊富ならしむるもの。ろ、言語材料の外的増加(外來語の増加)。

であります。此外金澤文學士の『ことばのいのち』を御参考にあります。此研究には便利でありませう。然し、此の如き研究には、關係學科の知識が必要でありますから、一通りの知識を養つた上、公平なる觀念を以て、精密に研究しなければなりません。此の如く、昔から國語の變化したる状態を研究いたしますと、從て日本語發達の時代を確定する事が出来るであります。兎に角、奈良朝と平安朝との間及び鎌倉時代に於て、我邦の言語が一大變化を爲したといふことは明であります。此發達の徑路に就ては、十分に研究しなければなりません。奈良朝と鎌倉時代と丈けに、時代を置いた許りで宜しいかといふことは、一の問題でありませう。猶此時代に就ては、チャンパレーン氏及び博物集博士の如き人々の研究が、少々はあります。然

日本語の時代

東洋比較言語學

し、此時代の研究則ち言語發達の研究は、一般に幼稚でありますから、我々は將來此點に就て大に力を盡さなければなりません。一、日本語の時代の研究は、尤も必要なことで、是がチャント出來上りますと、歴史的文典も容易に作る事が出來ませう。又、是は單に言語史の上から許りでなく、文學史上からも頗る重要な事であるのであります。第七、我邦の言語研究に於て、一、大弱點であらうと信じますのは、比較研究の絶無といふことであります。我邦の言語が、我邦で獨發したものでないといふことは、明なことであります。我邦の言語が、朝鮮、滿州、又は、南洋諸島の言語と、互に比較して研究するといふことが必要であらうと存じます。所謂東洋の比較言語學といふものの地位が、十分固まらない以上は、我が國語の起源、語源、又は、語根の研究といふものは、或點までは失敗するかも知れません。日本語の發達及び性質を精密に研究するには、此比較言語學といふものは、尤も必要なものであります。のみならず、古代の人文史を研究するにも、此學科が重要な位置を占めるので御座います。

以上は將來我々が研究すべき重要な問題に就て、大略御話致しましたので御座います。猶細かな部分に就ては、外に幾らも研究すべきことがありませうが、既に御承知のことで御座いませうから、委しくは申上げません。兎に角、過去に於て我邦の國語研究は、誠に不十分でありましたから、之を十分に補つて、日本語の地位を進めるといふことは、我々の責任であらうと考へます。諸君も今後は等の問題に就ては、熱心に御研究あらんことを希望いたします。

是で國語學史を終る積であります。が、今回は僅かな時間で、此一斑を申述べたので御座いますから、随分不十分なところがあらうと存じます。然し國語學者の傳と著書とに就ては、他日詳細なる研究を公にする積ですから、ドーソそれで御覽を願ひます。

國語學小史終

國語學小史跋

本月十二日の夕にやありけん、保科君、余を訪はれて、曰はく、「かの拙著國語學小史、初の豫定にては、昨日までに印刷を終ふるべき筈なりしに、止を得ざると起り來て、夫が爲に大に遅延して、刷上は未だ全體の三分の一にも至らず、校正はた全體の稍、半まで至りしほどなり。志かるに、かの畿内地方への出張（是は保科君が學術上取調の爲に東京帝國大學文科大學より命せられられし出張なり）は明後朝を期して是非とも出發せざるべからず。されば、残れる二百餘頁は明日一日中に組上と校正とを了せざるべからず。されども、是決して望み得べからざるとなり。さればとて、出發の期は延しがたし。予

今施すべき術に殆んど窮したり。就て、餘暇を有せられ
 ざる雅兄を煩さんは予の眞に恐縮するところなれど
 も、他に此窮を救ふべき途なきが故に、敢て雅兄を煩さ
 んどす。幸に懲察を給へ」といはるゝに、予は實は學淺く、
 識せまく、剩さへ、日夜繁忙をかこてるものなるが故に、
 この委托は決して事もなきとはあらざりけり。され
 ども、予は、身此地を去らん者にもあらず、又印刷校正の
 如きはさばかり勞の大なるものにもあらざれば、只暇
 なし、力足らず、どの故を以て、君の懇切なる依囑を却け
 て君の窮境を傍觀せんが如きは、平素の情誼として、余
 のよく忍ばるべきことにあらず。さればとて、万が一に
 もゆゝしき過にてもしいでたらんには、之をば如何に

かすべき。學兄、之を如何にもし、學兄のそをしもゆるし
 たまふべくば」と遂にいふに、君、そは固よりのとなり。わ
 れ自から書きたるを自から校正してすら、刷上りたる
 を見れば、誤植なほ常に多かるを、まして、他のものをや。
 否、予が原稿にすらも誤れるが多かるべし。夫見當りた
 まは、躊躇なく正して給へ。又、詞遣、假字遣、文字の組方
 などはいと妄なるも、いとふつゝかなるも、多かるべし。
 夫はた見當り給ひ心づき給は、聊も心おき給ふこと
 なく、改め正して給へ。大どなく、小どなく、凡て、雅兄
 が思のままに取り計らひて給へ。又、製本、その他、一切の
 ことにつきても、幸に高慮を給へ」といはるゝに、かへす
 べき語もなく、遂に承けにけり。かくて、君はその翌々

朝出發せられ、校正はその翌日より日々若干づゝ來れり。初校なるもあり、再校なるもあり、體裁のよきもあり、頗るあしきもあり、誤植の甚だ多きもあり、極めて少なきもありけり、予朱筆とりて校正し、くゆく。時には忘れて我が思ふまゝに改めもしつ、時には中途にて心つきて、さてなほ、凡て雅兄が思のまゝにどの語にたよりにて、敢てさかしらに筆を加へなごもしてけり。特に四五頁ばかり誤植極めて多きに、之を正さんとするに、原稿見當らす、止を得ずして、予が考をもて、心あてに彼是文字を加除せしところもありけり。されば、刷上りたるを君の一讀せられんには、或は君が心に叶はぬところも多かるべく、或はなかくに僻事となれらんも多かり

ぬべし。さはれ、兎にも角にも、今夕にして校正をば了へにたり。校正は、わが著書ならねば、特更に注意はしつれども、なほ見落せしも多かるべし。又植字工の直し漏しも聊はありぬべし。夫等は凡て著者の校閲を経て、別に正誤表を作りて、本書に添ふべし。讀者は夫によりて本文を一々に訂正せらるべし。さて、校正をする、く、一わたり本書を讀み通して見るに、著者は言葉遣の聊かあしきをば瑕にして、よくも我國語學の歴史をばかくもほゞ簡明には叙述せられけるものかな。上田大學教授の指導の庇陰は固よりさるとながら、著者の勞も亦甚太しきものありしに依らずばあらじ。されば予はまづ此勞に向ひて大に著者に謝

せざるべからず。次に、本書紙數ほゞ五百頁、誠に一の大著述なり。されども、本書は實に名の如く國語學の小史なりけり。叙述方の全篇を通して凡て簡略なる、例證の多端にわたらずして繁雜ならざる、國語學史上價値少き學者をば、或は略記し、或は全く掲げざる、是等は皆本書の小史たる所以なるべし。彼の、さまでの價値なき書冊をすら、或は活字を大にし、或は用紙を厚くして、以てその形軀を大にして、さて、之を以て大たるべき理由としてにか、徒らに大の字をば夫等の書冊に被らせて以て學者を瞞着するもの、甚だ夥多なる今の世にして、五百頁に垂とせる此書冊に名つくるに小史の名を以てせられたることよ、著者の心誠に涼しき哉。是蓋し本

書の世の雜書と撰を異にせる一證たるべし。予はこの本書の名實相背くことなきをば大に悦ぶなり。本書は誠に國語學の小史なり。夫れども、予は本書が寧ろ國語學の大史にも優りて現今の斯學の學者に歡迎せられ、又、夫等の學者に大裨益を與ふべきを確信す。是、此種の著書の未だ曾て出版せられしがなき現今に於ては、簡略なる小史のなかくに繁雜なる大史に優りて適すべきを以てなり。然れば、則ち、講述の時間の甚だ僅少なりしが故に、遺憾ながらも、大史のかくの如き小史にて留りしは、なかくに世の幸福にてありけるか。さもあらばあれ、予は寧ろ斯學の學者の本書の如き小史をば速に放擲して、保科君又は他の學者をして更

に國語學の大史を著述せしめ、かくてその大史を歓迎し、その大史によりて始めて裨益を得ん時期の來らんとを切に待つものなり。思ふに、保科君も亦予と全く同一の意見を抱かるゝなるべし。

校正を終りて、朱筆を措くに當りて、一言をこの巻尾に書きつく。

明治卅二年七月廿二日夜 岡田正美

國語學小史跋

本書は先きの月に、はやり出來上るべかりしを、兎や角と遅れて、その十日を過ぐるに、校訂をほ半に至らざりき。予また公の命をうけて、京阪地方に出で立つべき日も逼り、他に施すべき術なかりければ、止を得ず、學友岡田文學士に、校訂其他の事どもを依囑して出で立ちぬ。日となく夜となく、學の道にいそがはしく、いさゝかの隙だになき、君を煩はすこと、中々に心苦しき限りなりしが、君がこゝろよくうけがひ給ひしときの、予の嬉しさはまたいふべくもあらざりき。さて、公の命を果して、此月初めにかへり來りしに、その校訂は業已に既に終りて、製本はいふも更なり、其他の舛裁も君がまめなる

心づくしによりて、いともく麗しうなりぬ。予の喜びはたいふべくもあらざりき。故この書の多少取るべきところ、見るべきところありとせば、そは全く上田博士の指導と、岡田學士の助力とによる。若し足らはぬところ、誤れるところありとせば、あなかしこ、予が罪と知り給へかし。

己亥八月上澣

保科孝一又識

國語學小史正誤表

| 頁數 | 行數 | 誤 | 正 |
|--------|----|-------|-------|
| 一〇(目次) | 七 | 天音活川圖 | 天音活川圖 |
| 一 | 一二 | 商賈上 | 商賈上 |
| 八 | 三 | 自序の心に | 自序の心に |
| 一八 | 一 | 鶴峯、成申 | 鶴峯、成申 |
| 三六 | 一〇 | 假字遣 | 假字遣 |
| 四〇 | 一 | 技條 | 技條 |
| 四二 | 四 | 和文字 | 加文字 |
| 四五 | 一三 | さいふと | さいふと |
| 四九 | 一四 | 口傳 | 口傳 |
| 五〇 | 二 | 祕傳 | 祕傳 |
| 五七 | 一四 | 奥儀抄 | 奥儀抄 |
| 七八 | 六 | 漏れたもの | 漏れたもの |
| 七九 | 七 | 互爾傳波 | 互爾傳波 |
| 一〇三 | 三 | 若し | 然し |

| | | | |
|-----|----|-------|-------|
| 一二三 | 三 | 得るだらう | 得るだらう |
| 一四六 | 一三 | 置きまう | 置きませう |
| 一四七 | | | |
| 二二五 | 九 | 黒瀧、潮音 | 黒瀧、潮音 |
| 二五九 | 一三 | 八衢捷徑 | 八衢踏分 |
| 二六五 | 四 | 雅言集覽 | 雅言集覽 |
| 二七三 | 一〇 | 詞である | 詞である |
| 二七五 | 一四 | 裝束ぞく | 裝束 |
| 二九七 | 七 | 見え居 | 見え居 |
| 三〇七 | 四 | 神道家でな | 神道家であ |
| 三一四 | 八 | 居るに | 居る。又 |
| 三四七 | 一四 | 先ず | 先づ |

| | | | |
|-----|----|--------|---------|
| 三四八 | 一三 | 演ぜ | 演女 |
| 三七八 | 七 | さいふも | さいふのもの |
| 三八七 | 八 | 宜長 | 宣長 |
| 三九二 | 五 | ものでり | ものであり |
| 三九三 | 八 | 言つて | 言つては |
| 三九九 | 六 | 戊申 | 戊申 |
| 四〇〇 | 九 | 折衷 | 折衷 |
| 四一二 | 五 | 穴町 | 穴町 |
| 同 | 九 | 葦原 | 葦原 |
| 四二〇 | 八 | 除きましたで | 除きましたので |
| 四二一 | 三 | 附屬したるこ | 附屬したものと |
| 四四七 | 四 | 感歎 | 感歎 |
| 四四九 | 一三 | 意見 | 意見 |
| 四五三 | 九 | 閑 | 閑 |
| 四五六 | 六 | 御参考考 | 御参考 |

書中に『併併』とあるは『併』の行

明治三十二年八月九日印刷
明治三十二年八月十二日發行

國語學小史


定價金壹圓三拾錢

著述者

文學士 保科 孝

發行兼印刷者

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
右代表者 宮川保全
專務取締役



發賣所

東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
大阪市東區北久太郎町四丁目十七番屋敷
同 支 社

大日本圖書株式會社出版圖書特約販賣所

●東京府、丸善、嵩山房、水野、林、鶴喜、内田、大倉、長島、石川、青野、中央堂、中西屋、東京堂、播摩屋、芳流堂、目黒、共益商社、東海堂、北隆館、松村、穴山、一見、●大阪府、三木、梅原、柳原、石井、前川、岡島、丸善支店、吉岡、金川、岡本、花井、金尾、中井、小谷、中村、中川、吉東、松村、此村、田中、北村、●京都府、村上、藤井、松田、河合、●神奈川縣、田沼、丸屋、弘集堂、●靜岡縣、川上、廣瀬、杉本、吉見、菅沼、齋藤、鈴木、●山梨縣、五明堂、柳正堂、清水、●愛知縣、川瀬、片野、●三重縣、柴田、關西圖書會社、岩田、安屋、山田、●長野縣、四澤、朝陽館、水琴堂、柏原、丸山、南川、小林、奧村、皆川、今村、日新堂、文弘堂、土橋、廣文堂、戶塚、新井、●群馬縣、高橋、文江堂、文心堂、木田、塚田、中村、森尻、●埼玉縣、長島、水野、水村、田沼、●千葉縣、多田屋、朝野、堤、吉田、平野、中村、高寺、●栃木縣、内山、●茨城縣、川又、●宮城縣、高藤、伊勢、木文、●福島縣、田中、●岩手縣、佐藤、高橋屋、佐藤、●山形縣、牧野、八文字屋、素月、日向、伊藤、鈴木、白崎、西谷、富樫、●秋田縣、土屋、成見、藤島、東海林、大澤、●青森縣、鎌田、伊藤、浦山、今泉、●北海道、小鹽、萱間、白鳥、川南、池田、魁文舍、山本、最上谷、山崎、●新潟縣、覺張、目黒、松田、西村、室、中山、高桑、●富山縣、中田、學海堂、●福井縣、大北、品川、西村、●石川縣、近田、宇都宮、●兵庫縣、熊谷、中井、福浦、石田、木村、●奈良縣、御賣社、●和歌山縣、平井、宮井、●岐阜縣、成美堂、郁文堂、岡安、遊文堂、●香川縣、宮脇、開文堂、箸方、●德島縣、黑崎、●愛媛縣、向井、土肥、●高知縣、澤本、片桐、開成舍、●廣島縣、鈴木、●岡山縣、武内、●鳥取縣、德岡、●島根縣、川岡、園山、大蘆、●山口縣、小原松、白銀、●福岡縣、菊竹、積善館、森岡、●熊本縣、長崎、梶原、●長崎縣、鶴野、集榮堂、安中、●大分縣、甲斐、守田、野依、梅津、●宮崎縣、松井、秋澤、津野、河野、●佐賀縣、河内、●鹿兒島縣、吉田、●沖繩縣、豐見城、有馬、仲井間、●臺北縣、三省堂、●清國上海、ランブス、

明治三十二年六月朔

文部省編纂

露和字彙

全二冊洋裝
定價金貳拾五圓
量目一貫四百匁

猪野中行 閱渡部温校訂

訂正康熙字典

全十七冊和裝
定價金八圓
量目七百匁

伊澤修二 關伊笠 頌哉編纂

世界年鑑

全一冊洋裝
定價金貳圓七拾五錢
量目四百匁

國家教育社編纂

聖諭大全

全四冊洋裝
定價金三圓四拾五錢
量目九百匁

文學博士 栗田寬編纂

古風土記逸文

全一冊洋裝
定價金七拾錢
郵稅六錢

古風土記逸文考證

近刊

註古風土記

理學博士 齋田功太郎編纂

大日本普通植物誌

全一冊洋裝
定價金壹圓七拾錢
郵稅拾四錢

高桑駒吉 外二名校訂增補

增訂 吾妻鏡

全十冊和裝
定價金七圓
量目六百匁

吾妻鏡集解

全二冊
各冊定價金七拾五錢
定價金壹圓七拾錢
郵稅拾貳錢

吾妻鏡備考

全三冊
定價金壹圓七拾錢
郵稅拾貳錢

にほんれきし

全一冊洋裝
上製定價金拾圓
稅拾八錢並製定價
金三圓 郵稅拾四錢

島田三郎著 佐藤顯理英譯

開國始末

全一冊洋裝
定價金壹圓
郵稅六錢

海軍中佐 木村浩吉著

海軍圖說

全一冊洋裝
上製定價金六拾錢
郵稅拾貳錢並製定價
金卅五錢 郵稅六錢

英國シヂェウヰック原著文學士山邊知春
文學博士中島力造校閱文學士太田秀穂共譯

倫理學說批判

全一冊
定價金二圓五拾錢
量目三百九十頁

帝國文學會編纂

帝國文學

每月一回十日發行
定價一冊金拾錢
郵稅壹錢

東京學士會院編纂

東京學士會院雜誌

每月一回廿八日發行
定價一冊金七錢
郵稅五厘

印刷局官報部編纂

官報

一ヶ月金六拾錢

○法令全書

每月一冊發行
定價金拾錢
郵稅凡六錢

○職員錄

每年一冊發行
定價一冊金拾錢
郵稅一圓

文學士大町桂月外二名合著

國文學大綱

全十二冊
定價一冊金廿五錢
郵稅凡四錢
卷三迄既刊

文學士藤田劍峯外四名合著

支那文學大綱

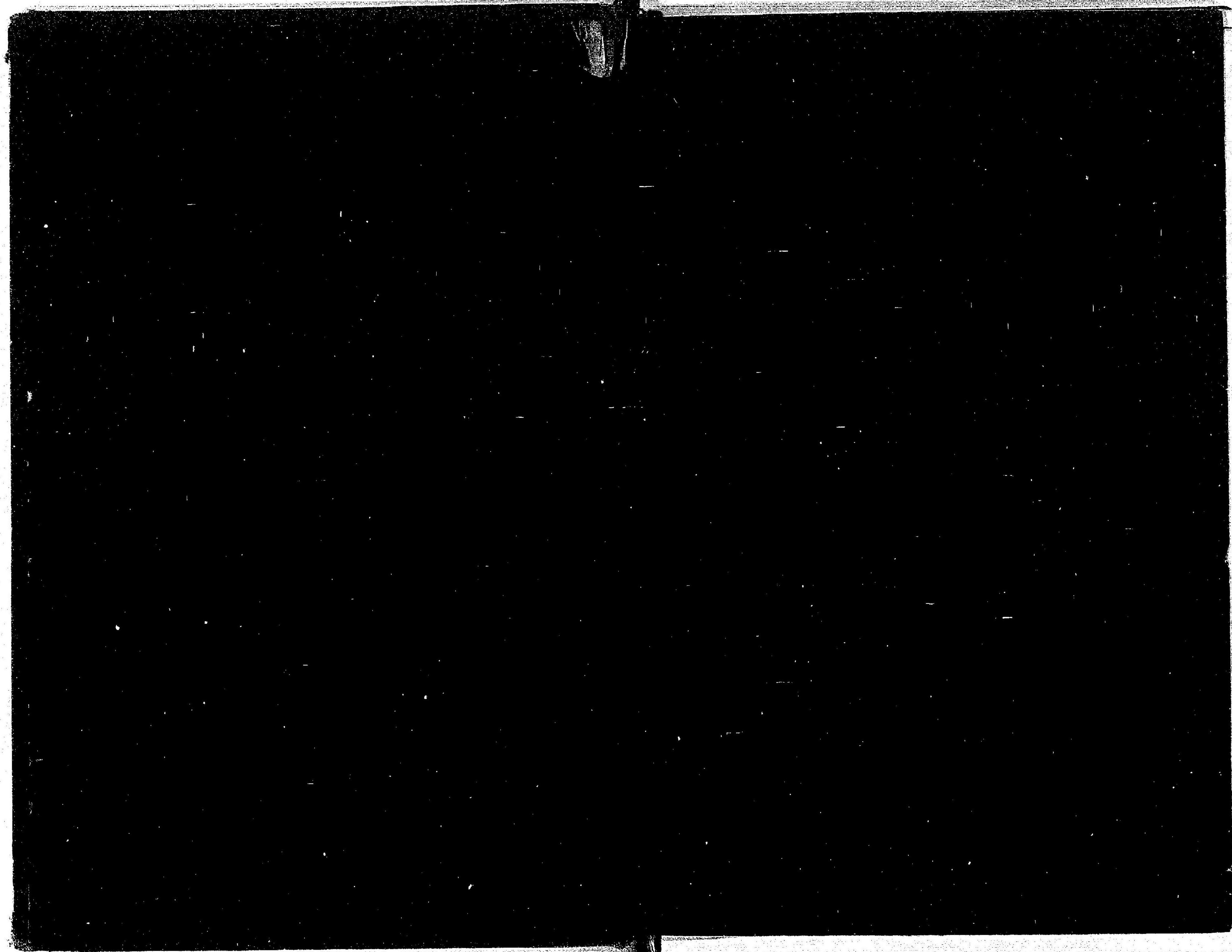
全十六冊
定價一冊金廿五錢
郵稅凡四錢
卷八迄既刊

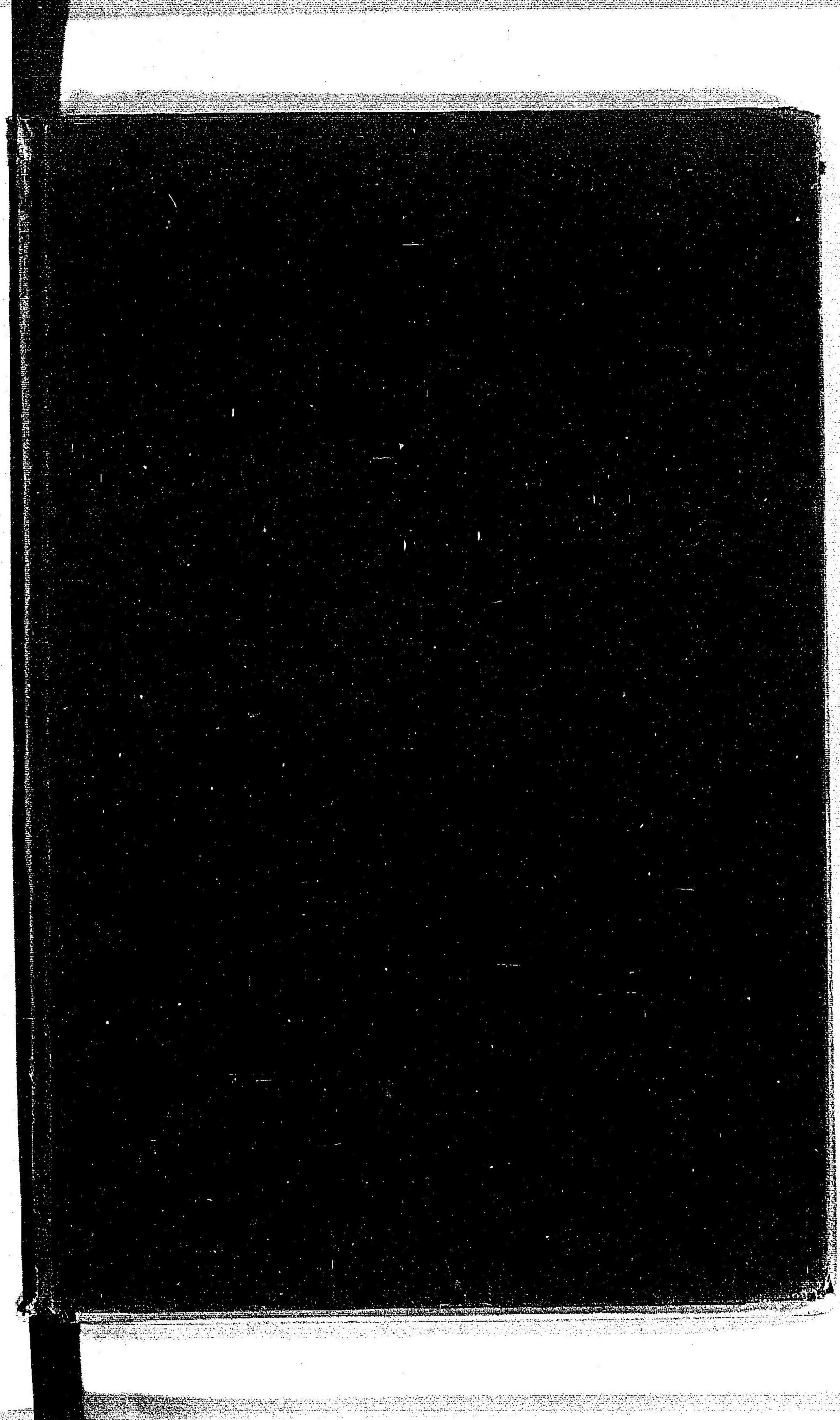
弊社は明治廿三年創立以來名家大家の編纂に係る
小學校中學校及び師範學校を初め其他專門學校に
於ける教科圖書并教師參考書を主とし併せて諸般
の學術技藝に有益なる圖書をも出版發賣す其圖書
目の如きは乞ふ出版圖書目錄に就て閱覽あらんこ
とを

東京

大日本圖書株式會社

明治卅二年六月





076877-000-0

810.12-H692k2

国語学小史

保科 孝一/著

M32

DAC-0036



